

第2章 郷土の文化、寺社等

第1節 文化財全般、指定等

1 指定文化財

登別原始林 国指定の天然記念物。大正13（1924）年12月9

（天然記念物） 日指定。

北海道中南部の植物区系を代表する天然林。登別市が誇る登別温泉の
一帯は、暖地性の植物が豊富で、ミズナラなどの樹木約60種、草木類
約110種の計170種が知られているが、アジア・太平洋戦争中の伐
採や相次ぐ風害により、現在その種類は少なくなっている。しかし、「天
然記念物登別原始林」内には、地獄谷・大湯沼などの景勝地もあり、豊
かな自然とともに、現在も四季折々の景色を楽しむことができる。

円空作観音像 登別市指定文化財。平成5（1993）年9月2日
（美術工芸品） 指定。

寛文6（1666）年、美濃国（現岐阜県）の僧円空上人が、道南各
地を行脚しながら、鉦作りという鉦一丁で観音像を刻み、そのうちの1
体が当時権現沢に祀られていた。この観音像は明治44（1911）年の
山火事で一時行方不明になったが、その後黒焦げになって発見され、現
在は地獄谷展望台の一角に社を設けて安置されている。



円空作聖観音像



登別原始林



円空作観音像

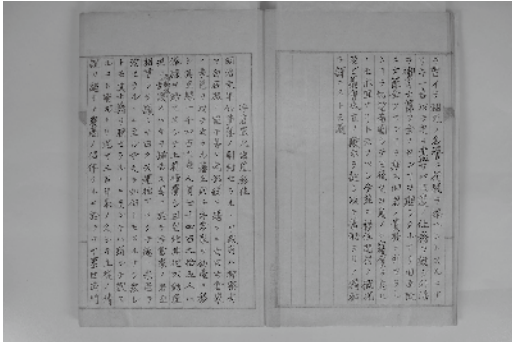
円空作聖観音像 登別市指定文化財。平成5年9月2日指定。

（美術工芸品） 円空作観音像が明治44（1911）年の山火事

で行方不明となったため、登別温泉の郷土史家石川修次氏が、昭和32
（1957）年、円空上人の中期多作時代の観音像1体を愛知県名古屋
市中川区の浄海山圓龍院観音寺（通称 荒子観音）から入手し、その後、
昭和40年に浄土宗観音山聖光院に奉安された観音像。



高村東雲作観音像



明治2年以降片倉家北海道移住顛末

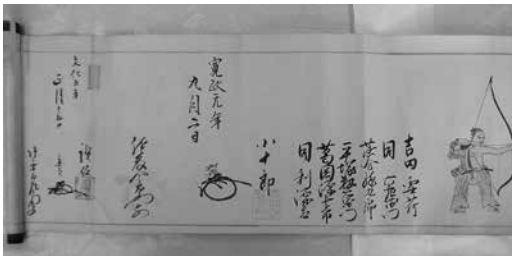
高村東雲作観音像 登別市指定文化財。平成5（1993）年9月（美術工芸品） 2日指定。

花月堂主岩原菊次郎ら信者が費用を出し合い、三代目高村東雲に製作を依頼し、昭和27（1952）年の観音山聖光院の新寺建立に際して寄進されたもの。聖観音菩薩本像と33体の化身観音像からなる。

日野愛憲の「明治2年以降 登別市指定文化財。平成5（1993）年9月2日指

定。登別市郷土資料館収蔵。

仙台藩士片倉家の家臣である日野愛憲が、現北海道伊達市に家臣団とともに移住した、仙台藩伊達家の一門、巨理伊達家の当主伊



黒澤家史料



幌別鉦山獅子舞（平成23年9月4日撮影）

達邦成らが、開拓の功績を認められて受爵したことを受け、その榮譽にあずからなかった主家との業績に大差ないことに悲憤して書き綴ったもの。片倉家の入植した明治2（1869）年以降のできごとをまとめており、記載された内容から、明治25年以降に書かれたことが分かる。

黒澤家史料 登別市指定文化財。平成10（1998）年2月10日（美術工芸品） 指定。登別市郷土資料館収蔵。

仙台藩白石城主片倉家の家臣で、主家とともに北海道に移住した黒澤家に代々伝わった武家文書33点。いずれも、近世に作成されたもので、弓の流派である日置流等の免許に伴う武術書が最も多い。また、片倉家内での黒澤家の家格を示す「知行目録」が10点含まれる。これらは全て、黒澤家が宮城県白石から携えてきた文書であり、北海道へ移住した武士

がどのような文書を重要とみなしていたかが分かる史料でもある。

幌別鉾山獅子舞

(民俗文化財、芸能)

登別市指定文化財。平成5(1993)年9月2日指定。

鉾山町で鉾山事業がはじまった明治39(1906)年から大正9(1920)年にかけて、宮城県出身者が郷里をしのんで行っていたのが取り入れられた獅子舞。鉾山町で働く人々の安全と平和、豊作の祈願をすると同時に、鉾山の金・銀・銅・硫黄の増産を願って、毎年8月15日の鉾山町の山神社の祭典のときに奉納されていた。昭和48年の鉾山閉山に伴い人口が激減したため、市内の有志により保存会が結成され受け継がれている。

登別化石林の炭化木

(トドマツ) (記念物)

登別市指定文化財。平成29(2017)年2月1日指定。登別市郷土資料館収蔵。

昭和59(1984)年5月5日、北海道縦貫自動車道工事の際、札幌市及び室蘭市の教員と北海道教育大学札幌校の春日井昭研究室の学生が中心となり結成した「胆振団体研究会」が発見した。発見された炭化木は、約4万3千580年前(較正年代)のクツタラ火山の噴火堆積物(火砕流サージ降下火砕物)により形成されたもので、約700平方メートルの範囲において確認された。

確認された炭化木は57本で、多数の樹幹が直立したまま埋積され発見される例は多くはない(春日井他昭和60年)。樹幹周囲の堆積構造から、この火砕流の流動方向が明らかにされた。また、樹種は現在の気候と異なり、トドマツ、エゾマツ、アカエゾマツ及びグイマツの4種が同定さ

れ、おもに針葉樹から成る樹高20メートル以上の森林の様相(胆振団体研究会昭和59年)であることがわかった。

ウルム氷期中期の寒冷な気候の変遷の実態を明らかにし、北海道及び登別市の自然史とクツタラ火山の活動史を解明する上で貴重な資料である。確認された炭化木のうち2本が、昭和59年5月15日に採取され、北海道開拓記念館(現北海道博物館)において保存処理され、トドマツは登別市郷土資料館、グイマツは北海道博物館において保管・展示されている。



登別化石林の炭化木(トドマツ)

幌別村役場文書

(美術工芸品)

登別市指定文化財。平成31(2019)年4月26日指定。登別市郷土資料館収蔵。

戸長役場設置前の数点を含め、明治13(1880)年開設の戸長役場の行政文書を引き継ぐとともに、幌別村役場内において作成又は受理され、保存されてきた明治5(1872)年から昭和21年までの、登別市における行財政、教育等の基礎的事項を断続的に網羅する文書96点。

明治13年の戸長役場設置前の数点を含め、戸長役場、二級町村制へと続く、現在の登別市の歩んできた行財政の様子をかなり連続して残して



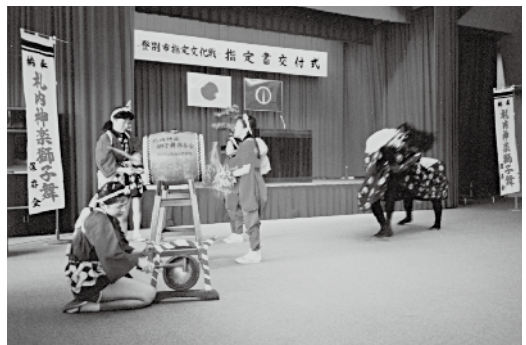
幌別村役場文書

おり、本市の歴史を明らかにする上で大変貴重な史料群である。

さらには、「公文書等の管理に関する法律」が、平成21（2009）年7月1日に公布、平成23年4月1日に施行され、国民の公文書に対する関心が高まっています。なかで、幌別村役場文書の存在は、公文書が行政職員のものではなく、法に規定する「国民共有の知的資源」であること、また、公文書を適切に残すことの重要性を示す、現代的にも重要な意味を持つものである。

**市の文化財指定を
解除された文化財** 登別市が、平成2（1990）年に「登別市文化財を断続的に指定していった一方で、札内地区で伝えられてきた「札内神楽獅子舞」のように、伝承や活動の継続が困難になったことから、指定を解除された文化財もある。

札内神楽獅子舞は、明治30（1897）年に開拓民として香川県綾歌郡から入植した10数人によって、故郷の大川神社に奉納されていたものが伝えられたと言われている。その後、札内地区の住民によって伝承されてきたが、日露戦争で若者を失い、さらに大正2（1913）年の大凶作や営農条件の悪化等で離農者が続出するなど札内地区の人口が減少



指定文化財となった時に披露された札内神楽獅子舞（平成5年）

し、二度にわたり中断を余儀なくされた。

昭和55（1980）年に復活の話が持ち上がり、昭和56年5月に地元有志により保存会が結成され、札内小中学校の児童生徒が中心となり獅子舞を受け継ぎ、市内で行われるまつりなどで披露されてきた。

平成5（1993）年9月2日には市の指定民俗文化財として指定されたが、平成10年3月の幌別小学校との統合に伴う学校の閉校とともに舞い手不足となった。保存会では活動を継続しようと何度も模索されたが、平成24年4月に解散が決定されたため、平成25年1月、指定文化財の解除となった。

五穀豊穡と地鎮の願いを込めて毎年札内神社に奉納され、祭典時には町内の各家を回り家内安全を願った。獅子舞2人、表太鼓2人、裏太鼓2人、鐘1人の計7人で構成される獅子舞で、獅子頭を低く押さえ、派手さはないが、緩急自在の激しい動作で、グツと大地を踏みしめるような獅子舞だったという。

参考文献

・北海道教育大学『北海道教育大学紀要第二部B生物学・地学・農学編』第35巻第2号（春日井昭・倉澤保文他）「クッタラ火山の火砕堆積物と

登別化石林) 昭和60年
 ・地学団体研究会「地球科学」38-6 (胆振団体研究会「登別化石林」の発見) 昭和59年

2 遺跡(埋蔵文化財)

遺跡とは、地中に包含されている過去の人の使用した道具や痕跡を指す。文化財保護法では、地中にある文化財として埋蔵文化財と定義される。

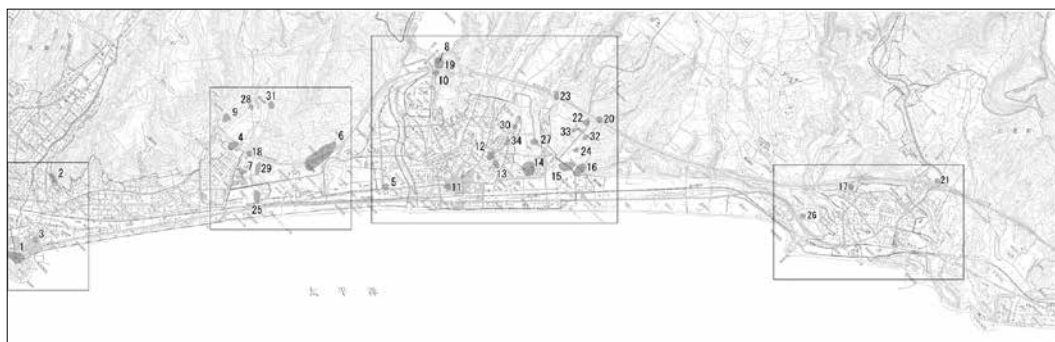
本市内には、令和2(2020)年10月1日現在、34か所の遺跡が埋蔵文化財包蔵地として登録されている(下図参照)。縄文文化からアイヌ文化の時代までの遺跡が確認されており、その多くが縄文文化の遺跡である。『登別町史』には、現在登録されていない遺跡も記載されているが、今回は、あくまでも埋蔵文化財包蔵地として登録されている遺跡のみとし、発掘調査などで遺跡の特徴がわかるものについては紹介し、それ以外は表での記載とする(図表3-2-2)。また、表中の緯度・経度は、各遺跡の中心部付近を世界測地系(JGD2011)で示した。

「鷺別1遺跡」

↳登別市で唯一の貝塚

鷺別1遺跡は、市内で唯一貝塚が残る遺跡であり、本市と室蘭市の境界線にあたる鷺別岬に位置する(図表3-2-3-1)。遺跡の範囲は、鷺別神社の上方から真宗寺の下あたりまで確認されている。室蘭市側にも広がっており、「鷺別貝塚」で記載されている。現在は海に突き出た岬だが、貝塚が作られた縄文文化前期のころは地球規模の温暖化による海水面の上昇(縄

図表3-2-1 遺跡分布図(地域区分)



文海進)で、島だったと考えられる。

遺跡の発見は、古く明治時代以来までさかのぼる。しかし、これまで本格的な発掘調査が行われていないため、詳しいことはわかっていないが、昭和35(1960)年、36年の室蘭大谷高等学校による発掘調査から、遺跡の内容をある程度知ることができる。

この調査では、貝塚や竪穴建物跡、墓などが発掘された。墓からは、石を抱えた状態の白骨が発見され、その上に大小の石が積み重ねられていた。埋葬されていたのは成人男性で平玉が副葬されていた。ほかに成人男性が1体、そして頭蓋骨の一部も発見されている。これらの発見は、北海道における縄文時代人とアイヌ民族との連続性を証明するだけでなく、当時の人々の身体について様々な情報を提供してくれる。

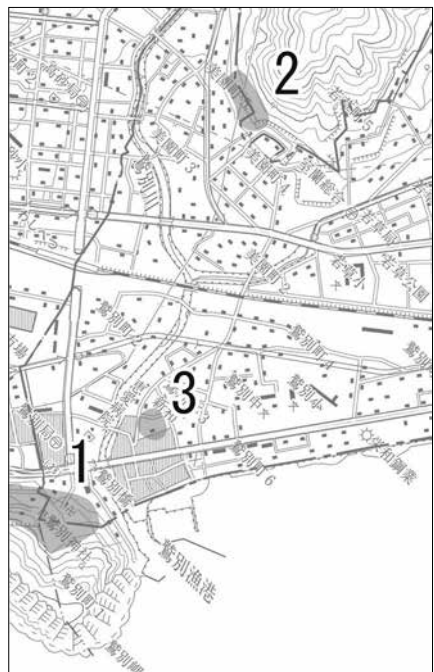
鷺別1遺跡は、開発による破壊

図表3-2-2 市内遺跡一覧

登載番号	名称	緯度			経度			所在地	時期									
		度	分	秒	度	分	秒		旧石器	縄文					統縄文	擦文	アイヌ	
										早期	前期	中期	後期	晩期				
1	鷺別1遺跡	42	21	13	141	2	58	鷺別町1丁目42										
2	鷺別2遺跡	42	21	59	141	2	34	美園町5丁目26-1・2										
3	鷺別3遺跡	42	21	26	141	2	59	鷺別町3丁目23-2・3										
4	富岸小学校遺跡	42	23	24	141	3	54	富岸町3丁目45・46・48										
5	川上A遺跡	42	24	8	141	5	40	桜木町2丁目5、7-2・4～6、8-1・2、10-2・3・5・6、11-1～3、12-1・3、13-1・2										
6	川上B遺跡	42	23	53	141	4	47	青葉町18～20、22、25、28～30										
7	富岸神社遺跡	42	23	18	141	4	12	富岸町1丁目2-1・2、3-1・16										
8	来馬チャシ跡	42	25	20	141	5	1	片倉町2丁目31										
9	亀田公園遺跡	42	23	27	141	3	28	富岸町56、57、58-1～3										
10	来馬遺跡	42	25	15	141	5	6	片倉町2丁目26-1、27-1、28、29										
11	幌別遺跡	42	24	33	141	6	13	中央町3丁目21-1										
12	山木1遺跡	42	25	3	141	6	21	常盤町4丁目31-1										
13	山木2遺跡	42	25	4	141	6	28	常盤町3丁目27-1～10、28-1～3、29-1～3、30-1～7、31-1～5										
14	千歳1遺跡	42	25	12	141	6	48	千歳町4丁目1、5-1～23-197、6-1～4-6、7-1-3～5-9-10、8-1、9										
15	千歳6遺跡	42	25	29	141	7	8	千歳町97-1-6-7										
16	千歳2遺跡	42	25	32	141	7	17	千歳町88-1、91-7～10-14、93-1-3～11、94-7～9-11・12-14-15										
17	トイチセコツ遺跡	42	27	13	141	9	55	登別本町2丁目68、69										
18	富岸遺跡	42	23	27	141	4	8	富岸町1丁目18-1・5、19-1・2、21-2-3										
19	片倉遺跡	42	25	19	141	5	2	片倉町2丁目30-2、3、32、35-1										
20	千歳3遺跡	42	26	0	141	7	1	千歳町189-38・39・41・42・56・57										
21	中登別遺跡	42	27	53	141	10	39	中登別町7										
22	千歳4遺跡	42	25	54	141	6	56	千歳町187-1-3-4、188-1-19										
23	千歳5遺跡	42	25	52	141	6	25	千歳町197-1～4、198-1-2										
24	千歳7遺跡	42	25	38	141	7	4	千歳町93-1-3、98、155-1、158-1-2										
25	若山町遺跡	42	23	13	141	4	35	若山町3丁目1～11										

登載番号	名称	緯度			経度			所在地	時期									
		度	分	秒	度	分	秒		旧石器	縄文					続縄文	擦文	アイヌ	
										早期	前期	中期	後期	晩期				
26	アフルナル	42	26	41	141	9	44	登別本町3丁目無番地、35-1・6										
27	千歳8遺跡	42	25	26	141	6	39	千歳町5丁目4-1・2・5-1～3、8-1・2・5・6丁目8-1・3、10-1・3										
28	富岸川右岸遺跡	42	23	47	141	3	43	富岸町86-1・8～12、90-1・7・12～20・22・23・28・34・81、92-1・28・38・39・41										
29	キウシト遺跡	42	23	24	141	4	21	富岸町1丁目13-1・2、14-39・40・42～44、17-1										
30	ウキシマニシト1遺跡	42	25	24	141	6	18	常盤町3丁目41-42										
31	富岸川左岸遺跡	42	23	55	141	3	53	富岸町181-1										
32	シンノシケウンオカシベツ遺跡	42	25	48	141	7	2	千歳町159-6										
33	シンケプシニナルカ遺跡	42	25	47	141	6	54	千歳町151-1、152-1										
34	ウキシマニシト2遺跡	42	25	16	141	6	21	常盤町3丁目37-5、38-1・3・4										

図表3-2-3 遺跡分布図（鷺別地区）



がほばないため、現在でも貝塚は残っており、貴重な遺跡といえる。

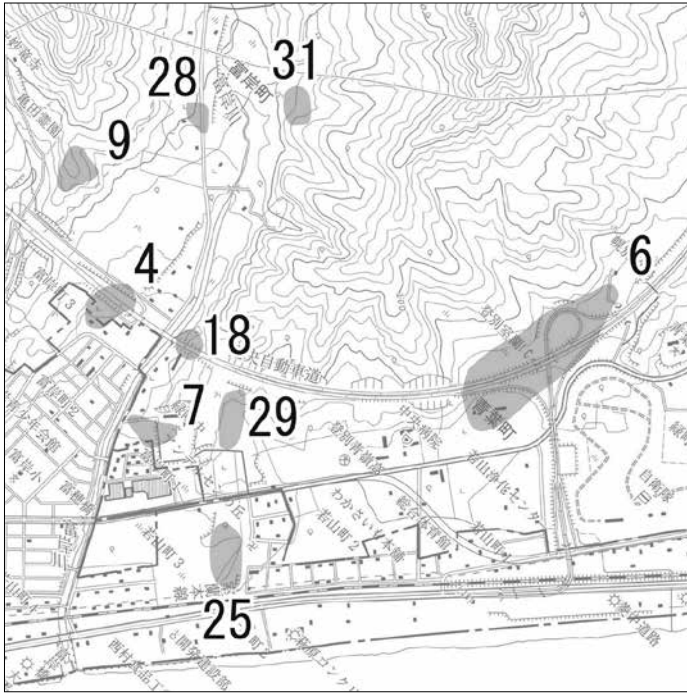
「川上A遺跡」

縄文文化晩期の土偶が発見

遺跡は、蛇行する二級河川である胆振幌別川の攻撃面の後背砂堤上にもともとは立地していた（図表3-2-1・5）。現在は、河川改修や埋め立て等により平坦な住宅地等となり、本来の立地状況を見ることはできない。標高は現在約4mほどであるが、埋蔵文化財包蔵地カードには5～7mとされており、砂堤が削平されたことが想定される。

遺跡の発見は、昭和40（1965）年11月の北海道新聞の記事に端を発する。土偶の発見者である西嶋幸夫・峻市氏によると、畑から多数の土器や石器が発見されているとの新聞記事を見て、当時小学生であった峻市氏と父の幸夫氏親子で現地に行ったところ工事が行われており、その現場にて土偶を採集したとされる。工事は、登別大谷高等学校教職員

図表3-2-4 遺跡分布図（富岸地区）



住宅の建設工事であり、遺跡が所在した砂堤を造成した際に土偶が出土したものと考えられる。この際に出土したその他ほとんどの遺物は散逸している。内容に関して詳細は不明であるが、西嶋氏によると個人で木製みかん箱2箱分の大量の土器や石器を採集することができたとされる。残念ながら、この遺物も現在はほとんどが散逸し、その内容を窺うことはできない。また、現場に居合わせた人々も出土遺物を持ち帰ったとされており、これらの状況から川上A遺跡には多量の遺物が含まれていたことが推測される。

正式な発掘調査が行われなまま遺跡自体が消滅し、遺物も散逸してしまつたため、遺跡の詳細を知ることが今となっては難しい。しかし、『登別町史』によると、「縄文晩期から続縄文期初頭にかけての土器・石器が出土する。土器には亀ヶ岡式の完形品もあり、石器は有柄の黒耀石製石鏃が多い」と記されている。また、粗く不鮮明であるが、出土遺物の写真も掲載されている。これらの出土遺物は、続縄文文化初頭に属すると考えられる。

土偶は、頭部のみであり、その他の部位については当時採集することができなかったとされる。土偶の時期は、正式な調査ではないため、出土した土器との関係性から判断することが難しい状況となっている。しかし、『登別町史』等から川上A遺跡の時期が縄文文化晩期から続縄文文化初頭にかけてであることがわかっており、形態からも土偶は縄文文化晩期に属するものと想定される（菅野・平成22年）。

「川上B遺跡」

↳ 縄文文化期の土石流跡発見

川上B遺跡は、登別室蘭インターチェンジ付近に広がっており、カミュインプリの裾野の緩やかな斜面に立地する（図表3-1-2-4-6）。

発掘調査は、北海道縦貫自動車道建設に伴い、昭和55（1980）年から昭和60年までの6か年にわたり、約4万平方メートルという範囲が調査された（財団法人北海道埋蔵文化財センター昭和58・60・61年）。

その結果、縄文文化早期から後期にかけての竪穴建物跡や11万点という膨大な数の土器や石器が発掘された。

とくに注目される点は、縄文文化中期の終わりから後期にかけての竪穴建物跡が70軒も見つかっていることだ。しかし、全てが同時にこの村

に存在していたわけではない。新しく建てられている建物は古い建物の窪地を利用している。同じ場所に何度も建てられているため、同時に存在した建物の数はもつと少ないと考えられる。

また、建物の炉の中からは、エゾシカ、キツネ、タヌキ、サメ、サケ、ウグイの焼けた骨が見つかっている。

さらに、災害の跡も発見されている。土器などが包含されている土層中の堆積物を調べた結果、「表面流出水で運ばれてきた小規模な崩壊起源の堆積物」と結論づけられ、土石流が発生したことがわかった。発生時期は、縄文文化中期～後期にかけてと推定されている。川上B遺跡で見つかった土石流跡は、北海道で災害とヒトとの関わりを明らかにした最初の発掘事例と言われている（『北海道の防災考古学』編集委員会編 令和2年）。

「千歳6遺跡」

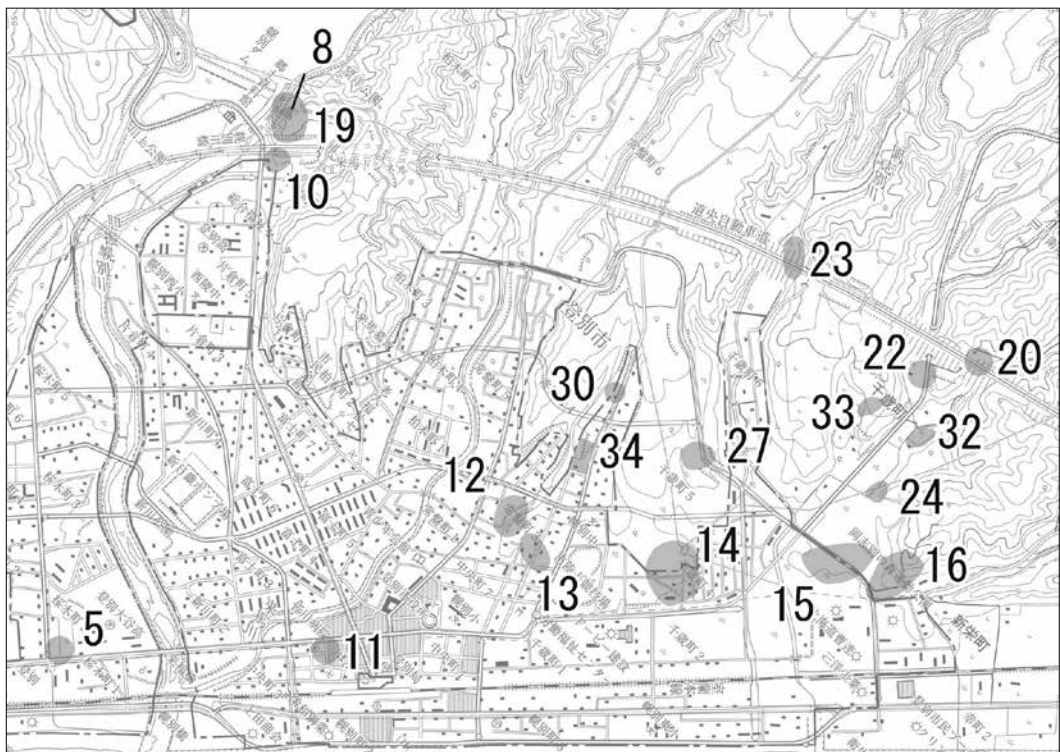
縄文文化中期の村だった

千歳6遺跡は、岡志別の森運動公園にある。現在は工事によって昔の地形は残っていないが、調査当時は、舌状に張り出した標高20mほどの平坦な台地だったようだ（図表3-2-5 15）。

発掘調査は、昭和56（1981）年に行われた（登別市教育委員会昭和57年）。その結果、縄文文化早期から後期にかけての土器や石器、そして竪穴建物跡や焚火の跡、落とし穴などが発見された。

竪穴建物跡は23軒発見され、全て中期の終わり頃に属する。また、遺跡から出土した土器の9割以上が建物と同じ時期のものであった。つまり、千歳6遺跡は縄文文化中期の終わり頃を中心にご利用された村であることがわかった。村を利用していた期間は長い期間ではなく、比較的短い

図表3-2-5 遺跡分布図（幌別地区）



ではないかと考えられている。

また、建物跡の中からは、炭化した柱が見つかっており、竪穴建物の構造を調べるうえで貴重な資料となる。

千歳6遺跡周辺の丘陵では、千歳1、2、7遺跡など多くの縄文遺跡が発見されており、市内でも過去の人々の生活が盛んに行われた地域の1つといえよう。

発掘調査当時は、道内での調査件数はそれほど多くなく、千歳6遺跡から出土した縄文土器や竪穴建物跡は縄文文化の村の様子や土器の研究などの先例として重要な役割を果たした。

「千歳5遺跡」

千歳5遺跡は、岡志別川の上流左岸、

儀式に使われた道具も発見 丘陵の斜面から谷底の平らな場所にか

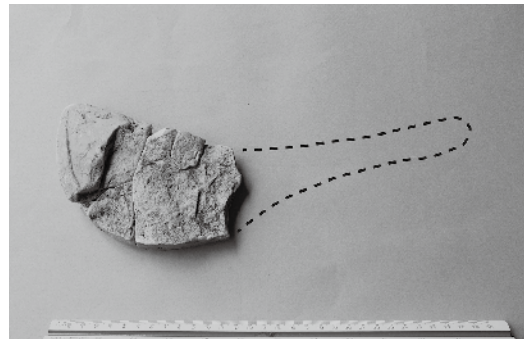
けて広がっている(図表3-2-5 23)。

発掘調査は、北海道縦貫自動車道建設に伴い、昭和57(1982)年、59年の2か年にかけて行われ、約5千平方メートルの範囲が発掘された(財団法人北海道埋蔵文化財センター昭和58・60年)。

その結果、縄文文化早期から後期中ほどの生活跡が見つかった。竪穴建物跡31軒、なんらかに利用された穴や、土器や石器が15万点以上も出土した。ほとんどの建物跡が、中期末から後期前葉に作られており、千歳5遺跡はその時代の村であることが判明した。

千歳5遺跡では、普段の生活で使われた道具が多数出土しているが、儀式に使われたと考えられる青竜刀形石器、石刀、異形石器、注口土器、土製円盤など変わった道具も出土した。

青竜刀形石器は、刀という名称が付いているが、実際に切ることはで



青竜刀形石器

ある。

縄文文化の理解において、生業生活で直接役立つ石鏃やナイフなどの「第一の道具」に対し、生業には直接役立つ儀礼などで使われる土偶などの道具は「第二の道具」と呼ばれている(小林平成8年)。第二の道具は、縄文文化の本質を探るうえで重要な要素と考えられており、縄文文化における精神文化の豊かさを示すものと言えるだろう。

「アンプルバル」

アンプルバルとは、海岸、または河

アイヌ文化のあの世の入口 岸の洞窟に対して付けられたアイヌ語地名であり、地方によって呼び方は異なるが、全て「あの世へ行く道の入口」という意味が付けられているものである(知里・山田昭和31年)。

これらには伝承や信仰が語り伝えられており、ウエベケレ(昔話)に

きない。何かをたたきつぶしたような痕跡もない。切る、たたくなどの物理的な機能を持つ道具ではないようだ。見つかる地域も東北から道南地域と限定されている。

注口土器は、現在、私たちが使っている急須に似ており、日常的に使っていたように感じられるかもしれない。しかし、この土器は数がそれほど多くなく、注ぎ口は男性器をシンボル化したものとされることから、やはり特別な道具で

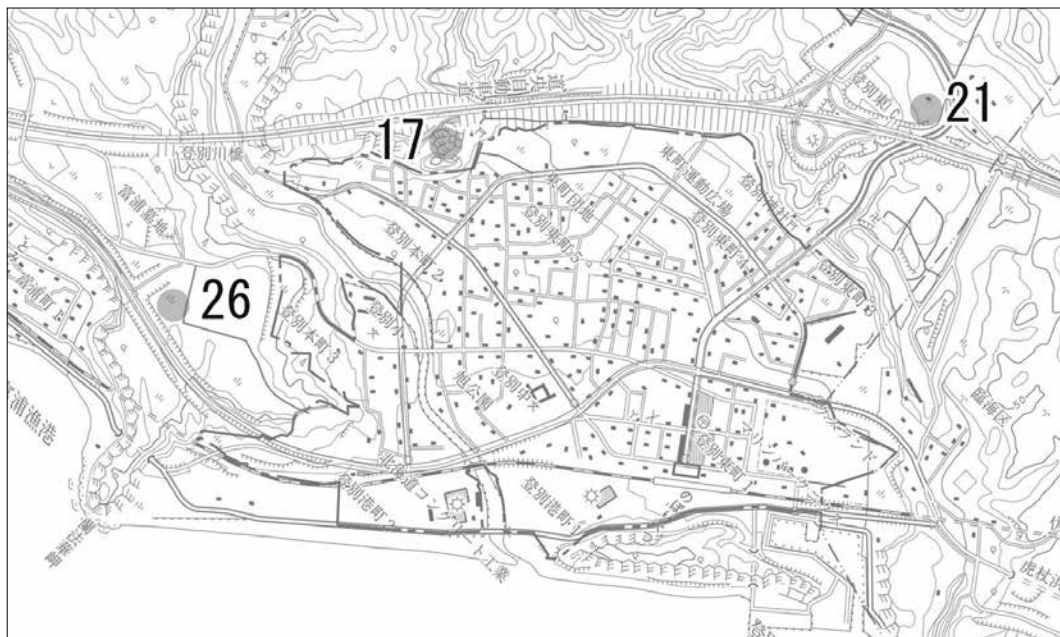
はよくアフルバルが登場し、海岸洞窟か山奥の河岸洞窟がああ世へ行く道の入口とされている。これらの物語は、アフルバルを通り生きながらあの世へ行ってきた人の帰来談として語られるのが一般的である。現実世界の地形と他界に対する信仰が、地名という記号によって結び付けられており、アイヌ文化における他界観を知る資料の一つと言える。北海道内のアフルバルは横穴タイプがほとんどであるが、本市に残るのは類例がほとんどない堅穴タイプである。

アフルバルは、登別本町3丁目に位置し、本市出身のアイヌ語研究者である知里真志保とアイヌ語地名研究者の山田秀三が、昭和30(1955)年に真志保の父高吉の案内により初めて調査された(図表3-2-6 26)。

現在のアフルバルは、昭和45年の国道36号の富浦バイパス工事により、一部が破壊された状態となっている。本来の形態は、平面は楕円形ですり鉢形のくぼみであり、上場は29・5×22^{メートル}、底部は13・3×6^{メートル}、深さは4・4〜4・8^{メートル}あまりである。底部にかけてらせん状の階段様となっており、伝って底へ行けるようになるらしいが、崩れている部分もあるため正確にはわからないと報告されている。「沢形の処に単純に加工したのではなく、純然たる人造の凹地であるようにみえる」と報告しているように、周囲の地形から見ても人工的に構築された遺構である可能性が非常に高いと考えられる。アイヌ文化では死者が行くのは地下であると考え(久保寺昭和44年)、堅穴型のアフルバルは、この他界観を反映した下方(地下)を意識した形態と考えられる。正確な測量調査、発掘調査が実施されていないため、年代等不明な点が多い。

各地のアフルバルの多くにはそれにまつわる伝承があり、本市にお

図表3-2-6 遺跡分布図(登別地区)





昭和30年（1955）のアフルバル（北海道博物館所蔵）



現在のアフルバル

いても同様に記録が残されている（知里・山田昭和31年）。

「そこは昔から近づいてはいけな場所であった。付近にはよいエゾニューがたくさん生えていたが、ここだけは取りにいかないことになっていた。また近くの大きな樹によく鷺が来てとまっていたが、アフルバルのそばだからといってとらなかつた（知里高吉）、「ここは地獄極楽へ行く穴だから子どもたちは行つてのぞいてはいけな」と云われていた。夜になると、亡者がここから出て来て、昆布や海胆などの磯のものを取り、戻つていったとのことであつた（幌別本町の板久孫吉）、「（要略）主人公である少年が、叔父にだまされアフルバルを通つてあの世へ行くものの、亡くなつた家族に諭されて現世に戻り、代わりに叔父をアフルバルからあの世へ送り出し、美しい女と結婚し、村とともに栄えていった（金成マツ伝承のウエベケレ）」。

他の地域と同様に、アフルバルのあるこの地のアイヌにアフルバルを媒体とした他界観が伝承されてきたことがわかる。

アフルバルから、人工物あるいは動物骨などは発見されておらず（知里・山田昭和31年）、平成23（2011）年の隣接地での試掘調査においても同様である。正式な発掘調査を経ていないため、詳細な測量調査などで全体を把握することが期待される。

「富岸川右岸遺跡」

「エゾシカを捕るための獵場」

富岸川右岸遺跡は、富岸川に向かつて東側に緩やかに傾斜する河岸段丘に立地する（図表3-2-4 28）。遺跡の南側には段丘を区画する無名の沢があり、背後は急峻な山地となっている。発掘調査は、宅地造成に伴い、平成19（2007）年に実施された（登別市教育委員会平成20年）。

竪穴建物跡は2軒検出された。ともに石囲炉と先端部ピットを有する炉が2基あり、建替えが行われている。時期は、建物跡の形態からともに縄文文化中期後葉である。

落とし穴は、379基検出された。落とし穴は、北海道ではエゾシカを捕るために作られた狩猟のための施設である。調査区のほぼ全域にわたつて、いくつも重なり合つて検出された。分布密度は一様でなく、4〜5基重複しているものも多い。形態は、溝状が主体であり、ほかに小判形のものの一部見られた。底面から、獲物を殺傷するため



溝状の形をした落とし穴

たつて、いくつも重なり合つて検出された。分布密度は一様でなく、4〜5基重複しているものも多い。形態は、溝状が主体であり、ほかに小判形のものの一部見られた。底面から、獲物を殺傷するため



出土した直径5センチメートルの玉

の杭の痕は確認できなかった。いくつかの落とし穴からは、構築時の掘削痕と考えられる幅10センチメートル程度の鋸状の痕が確認できた。時期は、縄文文化中期後葉から後期初頭である。

胆振西部では、これまで海に面した段丘上での発掘調査が多く、落とし穴の発見数が少なかった。しかし、この調査により、内陸の河川中流域の段丘上において、落とし穴が多数検出される可能性のあることが判明した。また、富岸川右岸遺跡は、全道的にみても、落とし穴の分布密度が最も濃い遺跡であることも判明した。ここに多くの落とし穴が構築されたのは、この場所でエゾシカを捕ることが期待できる場所であったためだろう。

「富岸川左岸遺跡」

「落とし穴を作った人たちの村か」

富岸川左岸遺跡は、富岸川左岸の山の中腹部にある緩やかな斜面に立地する(図表3-2-4 31)。富岸川を挟み、富岸川右岸遺跡から望むことができる。

土地の造成中に発見された遺跡で、富岸川右岸遺跡と同じ縄文文化中期から後期にかけての土器が発見されている。また、直径5センチメートルほどの大きな玉も出土しており、富岸川右岸遺跡を利用して人々が住む村であった可能性が想定される。

参考文献

- ・登別町『登別町史』昭和42年
- ・北海道大学北方文化研究室『北方文化研究報告第11輯』(知里真志保・山田秀三「あの世の入口―いわゆる地獄穴について―」昭和31年)
- ・アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌(下)』(久保寺逸彦「アイヌの死および葬制」昭和44年)
- ・北海道考古学会『北海道考古学46』(菅野修広「北海道登別市川上A遺跡出土の土偶について」平成22年)
- ・小林達雄『縄文人の世界』平成8年
- ・室蘭大谷高等学校『北海道幌別郡登別町字鷺別 鷺別遺跡調査概要(第一次調査)』昭和35年
- ・室蘭大谷高等学校『北海道幌別郡登別町字鷺別 鷺別遺跡調査概要(第二次調査)』昭和36年
- ・財団法人北海道埋蔵文化財センター編『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡 北埋調報1』昭和56年
- ・財団法人北海道埋蔵文化財センター編『川上B遺跡 北埋調報13』昭和58年
- ・財団法人北海道埋蔵文化財センター編『千歳5遺跡 北埋調報14』昭和58年
- ・財団法人北海道埋蔵文化財センター編『登別市川上B遺跡 北埋調報20』昭和60年
- ・財団法人北海道埋蔵文化財センター編『登別市千歳5遺跡 北埋調報21』昭和60年
- ・財団法人北海道埋蔵文化財センター編『登別市川上B遺跡C地区 北埋調報21』昭和60年

埋調報27』昭和61年

・財団法人北海道埋蔵文化財センター編『登別市亀田公園遺跡 北埋調報38』昭和62年

・登別市教育委員会・常盤建設株式会社『富岸川右岸遺跡発掘調査報告書』平成20年

・登別市教育委員会『札内台地の縄文時代集落址 北海道登別市千歳6遺跡発掘調査報告書』昭和57年

・「北海道の防災考古学」編集委員会編『本道災害遺跡最初の発見…川上B遺跡、北海道の防災考古学』遺跡の発掘から見えてくる天災』令和2年

第2節 郷土芸能

湯鬼神かぐら 湯鬼神かぐらは、昔、登別温泉の名所・登別地獄谷から鬼が出たという伝説に基づいて創作したもの

で、温泉の泉源・登別地獄谷のお湯に対する感謝と、まちの繁栄、旅人の安全を祈願して舞われるもの。

昭和48（1973）年、登別温泉湯まつりを契機に地元の20代の若者が15名集い、創作した。

登別地獄谷の噴火を太鼓で表現した「地獄暴れ打ち」、地元にある子宝湯に入ると達者な子供に恵まれるといういわれを「おかめ」と「ひよっこ」の舞で表現した「子宝舞い」、登別地獄谷から現れた赤鬼、青鬼が勇壮に舞う「湯鬼神群舞」の3部構成となっている。

現在は、登別温泉湯まつりで披露される。

子宝もちつき舞い 子宝もちつき舞いは、登別温泉の地元有志が集まり、登別温泉湯まつりが10回目を迎えることを記念し、新しい郷土芸能として登別温泉の名湯「子宝湯」にちなんで、

子宝に恵まれ、夫婦円満、無病息災を祈願して創作した。初披露は、昭和56（1981）年2月3日の登別温泉湯まつりであった。

毎年2月に登別パラダイス前の広場で披露していたが、平成15（2003）年に道道の温泉バイパス建設工事の関係で同ホテルが閉鎖となったため、一時中断した。21年1月に登別温泉の若者が泉源公園を舞台に復活させ、翌月の登別温泉湯まつりでも披露されて現在に至る。舞が終わった後は、ついた餅がふるまわれるのが恒例となっている。

熊 舞 子宝もちつき舞いのお披露目をした昭和56（1981）年2月3日の第10回登別温泉湯まつりの終了後、君島

勝湯まつり委員長から新しい郷土芸能の創出について提案がなされ、「けもの道しがなく、熊やキツネなどの動物たちが薬湯につかっていた登別温泉に先人がはじめて足を踏み入れたとき、山中で出会った熊の道案内で登別地獄谷にたどりついた」という伝説に基づき、室蘭市在住の舞踊家・花柳衛信（現・嘉門衛信）の協力と指導を受けて昭和56年7月に誕生したもの。

熊舞の練習に先立ち、のぼりべつクマ牧場において、熊の生態や仕草を何度も観察し、それらも踏まえながら登別ガーデンの大広間を借りて連日練習を重ねた。そして、昭和56年7月3日に登別地獄谷にて登別観

光協会役員に初披露し、大好評を受ける。この年は、7月20日開催の室蘭港まつりに出演し、8月3日には、NHK「北の夏」シリーズにて練習から披露に至るまでの様子が全道に放映される。そして、第18回登別地獄まつりの中日にあたる8月29日にも出演し、市民等から好評を得る。現在は、登別温泉の若者を中心に結成された「登別温泉熊舞の会」によつて登別地獄まつりで演じられるなど保存と伝承に努められている。また、登別温泉中学校、同校閉校後は登別中学校の生徒によつても引き継がれている。

幌別駒おどり

開拓の力となつた馬の活躍と、先祖の苦勞に感謝する気持ちを後世に伝えるため、昭和38(1963)年、幌別第一町内会在住の前川敏雄が中心となり創作された。

幌別第一町内会は、片倉家とその家臣たちによつて開拓された由緒ある地であることから、先祖の苦勞に感謝し、人と人との心のつながりを大切にしようと子供会を中心に保存会が発足する。

その後祭典などで発表を重ね、その素朴な踊りが好評を博していたが、後継者問題などで昭和52年頃から活動が一時休止する。その後、昭和59年9月から幌別東小学校と協力して活動を再開する。

現在は、幌別東小学校全校児童が参加して、毎年12月に行われる幌別地区チャリティー市民演芸会などで披露をしている。

幌別鉾山獅子舞

幌別鉾山獅子舞は、鉾山町で働く人々の安全と平和、豊作を祈願するとともに、鉾山の金・銀・硫

黄の増産を願つて毎年8月15日には山神社の祭典で奉納されていた。

元は明治39(1906)年から大正9(1920)年にかけて宮城県出身者が集い、郷里をしのんで鉾山町で行っていたもの。その後、東北地方の出身者も加わつて盛んになる。

昭和48(1973)年に北海道硫黄(株)幌別鉾業所の閉鎖に伴つて鉾山町の人口が激減し、獅子舞も次第に停滞ぎみとなつたことから後継者を育成し、後世に引き継いでいくために同50年に「幌別鉾山獅子舞保存会」を結成する。

現在は、刈田神社の祭典の際に同保存会によつて奉納されている。また、鉾山町においても幌別鉾山獅子舞をアレンジした獅子舞が行われている。また、昭和5年から同22年まで使用された2代目獅子頭は市郷土資料館で展示されている。

札内神楽獅子舞

五穀豊穰と地鎮の願いを込めて、札内神社や刈田家内安全を願つた。

明治30(1897)年に、香川県綾歌郡から移住してきた10数人によつて、故郷の大川神社(香川県仲多度郡まんのう町)に奉納されていたものが伝えられる。

入植当初の営農の苦勞の中で、故郷をしのんで奉納される神楽は、開拓の士気を上げる活力となつて、次第に札内地区に広まっていた。しかし、日露戦争で若者を失い、大正2(1913)年の大凶作で離農者が続出して6戸を残すだけとなつて中断し、伝承グループも解散し、道具も処分された。

昭和14(1939)年ころになって、地域の青年の中でこれを復活



札幌内神楽獅子舞で使われた獅子頭

させようとの機運が高まり、また、昭和18年には約100戸が移住してきたために再び盛んになったものの、これらの移住者も営農条件などから離農が相次ぎ、2度目の中断となる。

昭和55年秋ころに復活の話が持ち上がり、同56年5月には札幌内小中学校の協力のもと札幌内神楽獅子保存会が結成されカルルス温泉をはじめとする市内各地でも奉納され、平成5（1993）年9月2

日には市の無形民俗文化財に指定されるなど保存に努めてきたが、平成9年3月に札幌内小中学校が閉校するなど担い手である児童生徒数が減少したことによって3度目の活動中断となり、同24年に札幌内神楽獅子保存会が解散し、市の無形民俗文化財の指定も解除される。

札幌内獅子神楽で使用された道具類は、平成25年に市郷土資料館に寄贈され、同館で保管している。

鷺別獅子舞・

昭和50（1975）年12月に鷺別神社が40年ぶ

鷺別子ども獅子舞

りに改築されたのを機に誕生したもので、同神

社の氏子を中心に「鷺別町にも伝承芸能を」との呼びかけに対し、若いころに宮城県遠田郡涌谷町で獅子舞を教えていた草岡久男によって同町の獅子舞を参考に創作されたもの。

昭和51年7月に「鷺別獅子舞保存会」が発足して伝承に努める。昭和61年には、児童に郷土を知り、それに協力参加することなどを目的に鷺別小学校の児童による「鷺別子ども獅子舞」が結成され、同年7月の登別市民ふれあいフェスティバルで初披露する。このとき、鷺別小学校の飯澤校長が練習用に2体の獅子頭を製作する。平成5（1993）年度から中学生も参加する。

宮城県遠田郡涌谷町にある獅子頭が「白山太郎」と名付けられていることにちなみ、鷺別町の獅子頭を「白山二郎」と名付けている。

現在は、6月の鷺別神社例祭で町内を練り歩くほか、10月の鷺別小学校学芸会で披露されている。

北海太鼓

登別温泉に新しい郷土芸能を創作しようとの試みのもと、昭和38（1963）年に福井県の民俗芸能「奥越

太鼓」を基調に北海の荒波、登別地獄谷の壮絶な光景をアレンジして、北海道の荒々しい風土と若い息吹を太鼓で表現したものの。

創作者の大場一夫は、北海太鼓を札幌冬季オリンピックや大阪万博などで披露した。各地で披露した効果もあり、昭和45年にCBS・ソニーレコードで製作された『音の風土記・日本 北海道』編や、『日本の太鼓』に採録され、本市を代表する「音」の1つとなった。

その後、平成9（1997）年に大場一夫が死去したことで北海太鼓は解散したが、その流れを組む「北海自衛太鼓」（陸上自衛隊幌別駐屯地・昭和40（1965）年8月の創設時は「自衛隊北海太鼓」、昭和45年改称）や「北海いでゆ太鼓」（第一滝本館・平成10（1998）年創設）などが活動を続けている。

第3節 社 寺

1 神 社

刈田神社

鎮座地 中央町6丁目24番地

祭 神 保食神・大物主神・日本武尊

創 立 年代不詳

例祭日 8月23日

由緒等

刈田神社の創立は明らかではないが、天明6（1786）年の記録には、会所のそばに社及び鳥居があり、「妙見稲荷社」と称して産業・通商・航海・交通の守護神として祭られていたとあり、寛政12（1800）年に松平忠明が蝦夷地を巡検した際の絵図「松平忠明（塩崎分地）蝦夷地資料 ホロベツ一（郷土の人物87 上田市立博物館）」には鳥居及び社殿が描かれている。また、『北海道神社庁誌』には出典が明らかではないものの「道内最古の神社」と記されている。

仙台藩旧白石城主片倉小十郎邦憲が、幌別郡支配を命じられ、その子景範と家臣団が明治3（1870）年9月28日に幌別郡に移住した際に幌別郡開拓の守護神として旧領・白石の刈田嶺神社から日本武尊を分霊して合祀し、次いで同6年に四国からの移住者が金刀比羅宮から大物主命を分霊して合祀した。



刈田神社

明治4年7月に幌別村字ハマ70番地（現・幌別町1丁目）に社殿を移転新築して、名称を「刈田神社」に改める。この頃は祭祀を室蘭の神官・小保方勇（吉達）に依頼していた。同8年に幌別郡の郷社に列せられ、同11年11月1日に社殿を改築、同41年には社殿の修繕と増築を行っている。

大正9（1920）年5月に大西音松が専任の社司として赴任し、同14年1月19日に同村字ニナルカ

4番地の2（現・中央町6丁目24番地）への移転を出願し、同15年7月12日に許可を受けて移転する。

昭和15（1940）年6月7日には、神饌幣帛料供進神社に指定される。

昭和19年には、敵機飛来に対する警戒を行う防空監視哨が、それまでの幌別町3丁目5番地から境内地内東側に移転し、同20年9月まで監視業務を行っていた。

昭和27年9月25日に「宗教法入法」による法人格を取得する。また、昭和52年には宮城県刈田郡蔵王町の刈田嶺神社と姉妹神社提携を結ぶ。

境内には、片倉家14代の片倉健吉が題字を、北海道帝国大学総長佐藤昌介が碑文を書いた開拓記念碑のほか、明治天皇が明治14（1881）年に巡幸を祈念した御駐輦記念碑や、大正天皇奉祝大婚之碑、馬頭観世音の石碑など多数の石碑が建立されている。また、明治15年及び16年の

幌別郡への移住者によって明治16年2月に金刀比羅宮（香川県）に奉納された「北海道札幌県胆振国幌別郡開墾略図」（国指定重要文化財）の複製品が本殿内に書掲げられている。

歴代祀職者

祠官 小保方 勇

社掌 本間 直麿

社掌 宮内 秀善

社司 大西 音松

宮司 大西 豊

宮司 大西 昇

境内社

相馬妙見神社

祭 神 天御中主神

大正15（1926）年、幌別一円の馬産家が家畜の守護神として祭る。

三貴子神社

祭 神 天照皇大御神・須佐之男命・月読命

大山祇神社

祭 神 天之御中主神・大山祇大神・少彦名命・大己貴神

社宝

御鏡、まが玉、御剣、太鼓

棟札 2枚

湯澤神社

鎮座地 登別温泉町106番地

祭 神 天照皇大神・譽田別尊・大己貴尊・少彦名尊・稲田姫尊・

瀧川乃湯本翁命

創立 不詳（『明治18年幌別郡各村村治類典』では安政5（1858）

年と伝えるが、『北海道志』には安政5年に修理したとある）

例祭日 8月18日

由緒等

『野作東部日記』（安政年間）には、「傍の岡に小社有湯沢権現の額有」正一位湯沢大権現の祠あり」とある。安政5年、登別温泉に入地した瀧本金蔵が日頃から信仰していた八幡大神（譽田別尊）を登別温泉の産土神として祭った。

明治8（1875）年に「村社」に列せられ、同25年にそれまでの小祠を間口3間、奥行2間の社殿に改築。あわせて鳥居、階段、石灯籠、狛犬等を造成、境内を整備した。

大正4（1915）年7月4日、境内地拡張を出願し、同月15日に「国有未開地処分法」に基づいて、1千249平方メートルの土地の払い下げを受ける。

昭和3（1928）年、本殿及び拝殿を改築することとし、同年5月9日に保安林の一部の境内地への編入願を提出、同年11月30日に1反2畝9歩（約1千219・8平方メートル）の保安林が指定を解除されて境内地に編入した。

昭和5年7月25日に山形県西根村（現・寒河江市）の鹿島月山両所神



湯澤神社

社や溝延八幡神社の社掌を務めた石川正治が湯澤神社の社掌に就任した。同年に本殿、拝殿、神饌所、向拝、手水舎、祭器庫、社務所、境内整備などの計画を氏子総代、氏子有志とともに立案し、同10年造営委員会を結成して整備し、昭和11年9月6日に本殿の遷座祭を執行した。このときに登別温泉の産土神として、医薬の神である「大己貴尊」、「少彦名尊」と「瀧川乃湯本翁命」を合祀した。

昭和12年8月20日、頌徳碑と功勞碑の造営を決議、14年5月5日に竣功奉告祭を執行した。昭和19年8月には玉置神社（現・新十津川神社、新十津川町）の宮司・林田三郎が兼務することとなり、21年に石川佳中が宮司に就任するまで続いた。そして、31年10月には石川卓巳が宮司に就任した。

この間、昭和18年には神饌幣帛供進神社に指定され、終戦後の同21年に「宗教法人令」による「宗教法人湯澤神社」を、ついで同28年には「宗教法法人法」による「宗教法人湯澤神社」となった。

昭和30年に参道の石段を整備し、同33年に鉄筋コンクリート製の大鳥居を造営した。同38年には社殿及び社務所の老朽化が進んでいたことから氏子有志による造営委員会を結成し、社殿の修理及び社務所の全面改築、裏参道の舗装、石垣の構築などを行った。

その後も社殿等の整備を続け、昭和57年には祭器庫を建築、平成元年（1989）年4月に社殿の基礎を全面改築するとともに御神輿庫を新築し、7年には裏参道の石垣の改修工事も行っている。

平成15年8月、湯澤神社々号標（書家・桑原翠邦が昭和62年8月に揮毫）を竣工した。17年5月には現・社務所が竣工した。

境内には、瀧川乃湯本翁命碑、瀧本翁紀念碑、忠魂碑、東宮殿下大婚奉祝記念碑など多数の石碑が建立されている。

歴代祀職者

社掌	佐藤 守雄
禰宜	佐々木 文正
社掌	石川 正治
宮司	林田 三郎
宮司	石川 佳中
宮司	石川 卓巳
代務者	石川 昭
境内社	
三吉神社	

秋田県人会が秋田県の三吉神社から分祀し、昭和16（1941）年7月に建立したものである。元の社殿は、秋田県出身の堅田久次郎の寄進によるものであるが、平成26（2014）年に改築した。

登別神社

鎮座地 中登別町12番地2

祭神 天照皇大神・譽田別尊・大己貴尊・少彦名尊・稲田姫尊・

瀧川乃湯本翁命

創立 明治元（1868）年8月

例祭日 8月21日

由緒等

明治元（1868）年8月に地域の開拓者数名によって祠を登別村字登別へサンケ445番地（現在の登別本町2丁目）に建立し、明治24年8月15日に社号標も石で建立した。このときの主な世話人は、瀧本金蔵、玉井漢一、加納東逸、長坂宇之助、木村官之丞、小原福太郎であった。

明治30年、字ランホッケにあった金毘羅宮の社殿を移築するも、大正12（1923）年11月にこの社殿が老朽化したため改築した。

その後、参道の階段が木造で急こう配であったことから高齢者等の参拝の便を図るため石段を改修することとなり、昭和2（1927）年7月5日に北村長三郎、和泉周助、高見哲三、大文蔵の4氏から寄贈された石材を用い、登別石工同業組合員の労力奉仕で改修し、同年8月5日に竣工、翌6日に竣工式を執り行った。なお、現在、鳥居横にある社号標は、そのときに小原福太郎、長嶋安次郎を施主として建立し、登別温泉の石川梅治が揮毫したものである。

昭和2年8月5日付けで創立を申請し、昭和5年6月10日付けで無格社として許可を受ける。同年8月13日には、登別村字へサンケ445番地の2（1反2畝15歩・約1千239.7平方メートル）を神社敷地として、



登別神社

同445番地の3（1町9畝1歩・約1千887.6平方メートル）を基本財産として土地所有者から登別神社に贈与された。同年12月3日に湯澤神社社掌の石川正治が登別神社社掌の兼務を北海道庁から命じられて就任した。翌11年7月11日には登別本町2丁目72番地の原野1反6畝28歩（約1千679.3平方メートル）を「北海道国有未開地処分法」に基づいて国から払い下げを受けた。

昭和15年に皇紀2千600年の記念事業として現在地へ移転した。この移転に先立って、14年3月7日に中登別に住む佐藤常松から境内地3反歩（約3千平方メートル）の寄附を受けている。同28年3月30日に「宗教法」人登別神社」となった。

昭和15年の移転時の社殿は、鳥居をくぐり、参道を上ったほぼ正面に位置していたが、平成9（1997）年11月に現在の位置に改築した。このときに、旧社殿前で祭ってきた地神の神々を社殿内に合祀したことから、地神碑を新築した社殿裏に移設した。

歴代祀職者

社掌 佐藤 守雄

欄宜 佐々木 文正

社掌 石川 正治

宮司 林田 三郎
宮司 石川 佳中
宮司 石川 卓巳
代務者 石川 昭

薬師神社

鎮座地 カルルス町4番地
祭神 大己貴神・少彦名神
創立 明治32（1899）年8月6日
由緒等

カルルス温泉の開祖・日野久橋と開拓住民らがカルルス温泉の開場にあたり、同温泉の発展と入浴客の健康を願って産土神として大洗磯前神社（茨城県東茨城郡大洗町）から分霊して祭つたもの。

昭和39（1964）年9月に温泉の内風呂化などによってカルルス町7番地（現・オロフレ荘の横）から現在地に移転し、昭和52年10月29日に社殿を改築する。

境内には、日野久橋のカルルス温泉開発に対する功績をたたえる碑のほか、カルルス温泉での湯治で病状が改善したことへの感謝の気持ちを抱けるために寄進された石灯籠がある。また、神社の近くには、同じく湯治によって病状が改善した女性が寄進した宝泉観音ほうすいのかんのんがある。

上登別神社

鎮座地 上登別町42番地
祭神 天照皇大神
創立 昭和50（1975）年9月15日
例祭日 9月15日
由緒等

上登別地区の住民が、この地区の安寧を願って伊勢神宮からお札を受けて車列を連ねて千歳空港（当時）から鎮座地に運び、輪西神社（室蘭市輪西町）から神官を迎えて祭つた。以後も地域の住民によって境内地の整備（草刈り・清掃など）が行われている。

稲荷神社

鎮座地 中登別町53番地1
祭神 豊受大神
創立 平成4（1992）年4月23日
例祭日 1月1日
由緒等

登別伊達時代村が開業した平成4年4月23日に豊川稲荷札幌別院（札幌市）からいただいた茶枳たぎ天像を祭り、創建する。その後、平成30年12月に、茶枳天像を豊川稲荷札幌別院にお返しし、改めて眞名井神社（京都府）からいただいたお札を祭る。

富浦神社

鎮座地 富浦町1丁目53番地

祭神 保食神・金比羅大神

創立 明治33（1900）年6月5日

例祭日 8月2日

由緒等

明治4年に片倉家旧家臣4戸11人が入植し、刈田神社の祭神を分祀する。その後、明治16年に香川県からの移住者が背中に背負ってきた金比羅宮の分霊を合祀する。

境内には、開拓三柱神の祠、招魂碑、水神大神が祭られている。また、富浦漁港の近くに登別漁業協同組合が海難殉職者慰霊碑及び魚霊碑を建立していたが、平成24（2012）年の同漁港の工事に伴って本殿の横手に海難殉職者慰霊碑は移設、魚霊碑は改めて建立された。

札内神社

鎮座地 札内町

創立 昭和40（1965）年9月23日

例祭日 9月23日

由緒等

昭和40年9月23日に地域住民の心の拠り所として札内神社碑（赤松秀二郎揮毫）を建立し、翌年に三原順一が提供した杉丸太材を用いて佐々木守をはじめとする地域住民が木製の鳥居を建立した。

平成6（1994）年9月、木製の鳥居が老朽化したため、鋼材にて再建する。

社殿は設けていない。碑の横には土俵が設けられ、祭典の際には子ども相撲が行われる。また、祭典の日にあわせて日本工学院北海道専門学校前に建立されている地神碑の祭りも行っている。このときに地神碑の前に掲げる幟二流は、西札内町内会の会員が1年ごとに当番となって管理している。

東札内神社

鎮座地 札内町494番地

祭神 豊受大神

創立 昭和23（1948）年4月

例祭日 8月14日、15日

由緒等

昭和23年4月、樺太の小能登呂このとろ（現サハリン・コストロムスコエ）からの引揚者が東札内に入植した際に、小能登呂神社のお札を祭って東札内神社として創建する。

創建当初は、社殿を設けていなかったが、昭和25年頃に地域住民の手によって社殿を建設する。しかし、この社殿は簡素なつくりであったために老朽化が進み、昭和55年4月17日に地域住民の手によって改築する。現在、この改築の際の棟札が社殿内に安置されている。また、社殿の改築した際には近隣の札内町307番地4付近にあった馬頭観世音の石碑を社殿横に移転した。

神社の例祭では、相馬神社（伊達市）の神官によって祝詞を捧げた。そして、社殿前では子ども相撲や演芸、矢倉を組んで盆踊りなどが行われ、東札内地区のみならず、西札内や来馬地区からも遊びに来るほど盛況であった。しかし、平成期に入ったころから東札内地区の人口減少などによって徐々に開催規模を縮小していき、現在は祝詞を捧げるのみとなっている。

山神社

鎮座地 鉾山町

祭神 大山祇大神

創立 明治40（1907）年7月15日

例祭日 8月15日

由緒等

鉾山での安全と地域の安寧を祈願して祭ったもの。

昭和48（1973）年には、幌別鉾山（壮瞥町黄溪）の閉山に伴って

同地にあった硫黄山神社（大正9（1920）年創立）を合祀する。

富岸神社

鎮座地 富岸町1丁目3番地2

祭神 天照皇大神

創立 明治39（1906）年8月

例祭日 8月の第1日曜日

由緒等

除隊した室蘭の屯田兵が中心となり、現在の新日鉄球場の東側丘陵上にあった丸山神社（現・中嶋神社）からお札を受けて創建する。

元は富岸町3丁目43番地（亀田記念公園東側）の山の中腹にあったが、明治45年に現在地に移転する。昭和42（1967）年8月16日や平成12（2000）年7月に社殿等を改築したほか、平成9年7月には鳥居の建替えを行った。

例祭日は、元は8月17日であったが、氏子に会社員が多くなったことから参加しやすいように昭和56（1981）年から8月の第1日曜日となった。

境内には、馬頭観世音、地神碑、不動明王像が祭られている。

上鷲別神社

鎮座地 美園町5丁目

祭神 保食神・日本武尊

創立 昭和39（1964）年7月

例祭日 7月最終土曜日及び日曜日

由緒等

河川整備がなされる前の鷲別川は、大きく蛇行して流れており、大雨の際には木橋が流失したり、道路が決壊したりするなど甚大な被害が発生していた。そのため、鷲別川を鎮め、氾濫しないよう祈願するため、昭和39年7月に室蘭市の輪西稻荷神社の祭神を分祀し、上鷲別神社として創建する。神社創建の翌月には、神社前で第1回の「上鷲別神社祭典」

が行われ、神社建立を一同で喜びあった。

創立後は、祭典を鷺別神社と合同で開催していたが、昭和42年7月からは、刈田神社から神官を迎えて祭典を単独で開催するようになる。

社殿は、ボンズ山を中心に牧場を経営していた坂本末五郎が、輪西稲荷神社の改築時にその古材を受けて現在の美園町5丁目23番地の山側に造営した。昭和53年7月に、現在の上鷺別墓地付近に移転したものの、地域に火事などが多発し、「墓地の側に神社を置くのは良くないのでは」との意見が地域住民の間から出たことから同59年6月に現在地に移転した。

昭和61年7月に美園町会のボランティアによつて参道の階段をコンクリート製に改修、平成7（1995）年7月に鳥居を建て替え、同8年から祭典の開催日を7月の最終土曜日及び日曜日に変更した。

鳥居横には地神碑及び馬頭観世音の石碑が各1基安置されており、創立当初から神社の移転とともに移動している。

鷺別神社

鎮座地 鷺別町1丁目35番地

祭神 保食神、大綿津見神

創立 年代不詳

例祭日 8月9日

由緒

明治33（1900）年11月3日に鷺別町有志林・造地に住民が保食神を祭る祠を建立する。その後、明治39年春に、1頭の大きなクジラが鷺

別の前浜に打ち上げられたので、その肉を近隣の町村の住民に売り、それを基金に村の有志からの寄付金をあわせて、祠を改築して鷺別神社とする。

昭和21（1946）年9月30日に鷺別小学校で奉安殿として使用されてきた建物を譲り受け、境内地に建築する。

昭和49年には、老朽化した社殿の改築を行うとともに、鳥居の建替えも行い、現在に至る。

境内には、建立の基金とした鯨の骨を祭る祠のほか、忠魂碑、堀嘉国先生頌徳碑、馬頭観世音などがある。

「登別温泉地形図」には、現在ののぼりべつクマ牧場入口付近に「稲荷神社」と、子どもの国園内に「弥彦神社」との記載がある。

稲荷神社は、一時期、第二滝本館の中庭に移設されていたが、同館の閉鎖後に建物を引き継いだ日活ホテル時代にも存在し、同ホテルが廃業する際に瀧泉寺（中登別町）に移設した。また、弥彦神社を知る人がおらず、現在は存在していない。

また、川上町の「一宮神社」は、昭和34（1959）年の移転以降も西川上、東川上、奥川上の3地区の氏子によつて祭祀が行われてきたが、氏子の高齢化などのため祭祀の継続が難しくなり、平成16（2004）年5月に祭神を、分霊を受けた伊弉諾神社（兵庫県淡路市）に返還し、廃止した。

美園町6丁目の「桜ヶ丘神社」は、昭和55（1980）年に中嶋神社（室蘭市）からお札を受けて、町内会員等によつて祠を建てて祭つて



薬師神社



上登別神社



稲荷神社



富浦神社



札内神社



山神社



富岸神社



上鷺別神社



鷺別神社

いたが、町内会役員の交代等によって祭祀の継続が難しくなり、平成2(1990)年に廃止した。

2 寺院

慈照山報徳寺

所在地 上登別町42番地
 宗 派 単立
 本 尊 聖観世音菩薩
 創 立 昭和62(1987)年9月13日

寺号公称 平成4(1992)年4月28日
 由緒等

黒田恭永が、宗派にとらわれずに参詣できる寺が必要との考えから特定の宗派に属さない寺院として昭和62(1987)年9月に現在地に慈照山報徳寺を創立し、平成4(1992)年4月に宗教法人の認可を受ける。

境内には、六地藏のほか交通安全を祈願して建立した馬頭観世音の石碑等がある。

歴代住職

初代 黒田恭永

観音山聖光院

所在地 登別温泉町119番地1

宗 派 浄土宗

本 尊 阿弥陀如来

創 立 明治28(1895)年8月

寺号公称 昭和29(1954)年

由緒等

明治28(1895)年8月、室蘭市沢町18番地の満岡寺住職の飯島覚道が、現在のセイコーマート登別店付近に説教所を開設して布教教化に努め、そのかたわら寺子屋を開設して児童教育を行う。

当時の登別温泉は人口が少なかったため寺院の経営維持には困難が伴い、しばしば法灯が途絶えがちであった。明治38年には失火により

焼失、その後、現在の室蘭警察署登別温泉交番付近に、次いで登別温泉町115番地先（現在の聖光院の北側）に移転し、中野隆英が引き継いだ。病弱のため引き揚げ住職不在の寺となる。太平洋戦争の開戦と共に一層荒廃の度を早め、昭和19（1944）年ころに解体した。

昭和25年5月、飯島寛道徒弟の渋谷隆道が遺志を継承し、また、養父政吉の菩提のために再建を志し、有縁の厚志を募って同27年に新寺を建立、同29年に「観音山聖光院」を公称する。

昭和33年には、大正初期に建立され、その後の風雨により風化が著しかった舟見山の三十三観音について、檀信徒の有志が施主となり、法然上人750年の御忌記念事業の一環として再建する。

昭和37年には青少年教育の一環として観音寺ユースホステル（同61年には「かんのんじユースホステル」と改称する。）を開設するが、平成4（1992）年9月に休館し、後に廃館する。

昭和40（1965）年6月1日に旅館梅の家を経営する石川脩次より円空上人鉦作り聖観音像1基の寄進を受ける。同年11月には登別温泉三大史蹟の1つである円空上人鉦作り観音像を盗難から守るため、当寺にて保管し、その後地獄谷に安置する。

昭和42年頃、登別温泉町202番地先堤防敷地内より自然湧出の泉源（含硫黄ナトリウムカルシウム塩化物泉（硫化水素型））を発見して昭和45年5月29日に権利を取得し、境内建物にある湯船に給湯する。

昭和51年には鉄筋コンクリート造、地下1階地上3階（約320坪）のユースホステル併設の新寺院を建設する。

平成5（1993）年9月2日、地獄谷安置の円空上人鉦作り観音像、寺内安置の円空上人鉦作り聖観音像及び高村東雲作三十三化身観音像が

登別市の文化財に指定される。

歴代住職

初代 飯島寛道

2代 高柳頼光

3代 藤田塩音

4代 混金成

5代 斉藤照範

6代 中野（奥津）隆英

7代 渋谷隆道

8代 渋谷隆芳

※6代と7代の間に無住時代があり、大工渋谷政吉、小針トシ夫妻が維持管理する。

恩泉寺

所在地 登別温泉町164

宗派 真宗興正派

本尊 阿弥陀如来

創立 大正7（1918）年

寺号公称 昭和21（1946）年8月10日

由緒等

大正7（1918）年に札幌別院輪番長尾猛及び千葉憲亮が開教する。同9年2月12日に説教所の設立が認可され、主管者千葉保亮が住職となる。

昭和16（1941）年3月23日に藤澤憲清が温泉教会の設立を願ひ、認可される。同21年7月1日に寺号を恩泉寺と改称、同39年10月1日、鉄筋コンクリート造の本堂を建築する。

歴代住職

初代 長尾猛・千葉憲亮

2代 千葉保亮

3代 藤澤憲清

4代 藤澤圭介

登竜山妙慎寺

所在地 登別温泉町223番地の2

宗 派 日蓮宗

本 尊 久遠実成本師釈迦牟尼仏

創 立 昭和30（1955）年5月19日

寺号公称 昭和40年1月21日

由緒等

蜂谷妙慎が、昭和32年10月1日に室蘭市幕西町63番地に妙慎教会を創設し、その後、登別温泉町の勝鬨の滝を荒行の霊場にしようと決め、同33年9月に現在地で開山する。

蜂谷妙慎が、昭和38年7月1日に逝去したため、その弟子の逢見妙慧が後を継ぎ、同40年1月21日に寺号公称する。

逢見妙慧が平成元（1989）年6月に逝去した後は、松尾啓修が跡を継いだ、同氏も平成23年4月27日に逝去したことから、代務住職と

して、法華寺（登別市中央町）住職の木村寛朋が管理する。
歴代住職

初代 蜂谷妙慎

2代 逢見妙慧

3代 松尾啓修

4代 木村寛朋

禅林寺

所在地 中登別町217番地4

宗 派 曹洞宗

本 尊 釈迦如来

創 立 昭和2（1927）年3月

寺号公称 昭和27年10月1日

由緒等

大正15（1926）年6月、齋藤貞吉の発起尽力により岩手県一関市字真栄町の曹洞宗瑞川寺の31代三浦無学が登別温泉町118番地に説教所を創設し「放光堂」と称する。昭和29（1954）年4月に「宗教法人令」により宗教法人禅林寺と改称し、同51年10月20日に現在地に移転する。この間、昭和5年5月から寺の事業の一環として保育園を開設し、幼児保育にあたっていたが、昭和52年4月に市立登別温泉保育所が開所したため、保育園は閉園する。

なお、同寺が所蔵する過去の記録には、昭和16年11月3日に皇后陛下より御内帑金の下賜があったと記録されている。

歴代住職

初代 三浦無学

2代 千葉全英

3代 千葉全教

4代 千葉正俊

成田山滝泉寺

所在地 中登別町220番地⁵

宗 派 真言宗智山派

本 尊 不動明王

創 立 大正8(1919)年7月7日

寺号公称 昭和27(1952)年7月21日

由緒等

大正6(1917)年3月8日、新潟県北蒲原郡松塚村出身の本間実
畔が、登別温泉町の小田良治所有地内に堂宇を建て、成田山教会を設立
する。

大正8年7月7日、国有未開地とされていた登別温泉15番地及び7番
地の払い下げを受け、15番地に堂宇を建立する。

大正9年8月8日に実畔が死去した後は、住職に神野実雄、森高観恵
など数人の交代があったようであるが、記録が無く詳細は不明である。

昭和10(1935)年10月1日、渡辺照寛が檀徒の招請を受けて来泉
して住職に就任し、同17年3月30日、「宗教団体法」の制定に伴い「真
言宗登別教会」となる。昭和22年、「宗教法人令」の施行により「成田

山滝泉寺」を創建、同25年8月21日に寺院規則を改正して、成田山新勝
寺の末寺となる。

昭和26年4月、「登別幼稚園」の設立認可を受けて、住職が設置者兼
園長に就任する。同園は、寺院が現在地に移転するまで存続する。

昭和38年11月28日に開催した総代会義にて、現在地への移転について
協議し、新たな本堂、庫裡等の建築費用は境内地の売却代金をもって充
てることとして移転を決定する。同年12月19日、原野であった現在地を
購入する。

昭和39年5月25日に現在地に仮の本堂を建築して移転し、同39年10月
28日に本堂・納骨堂・庫裡を新築して、同42年10月に落慶法要を厳修す
る。この頃、本尊の不動明王像(小笠原安兵衛仏師)が檀家の中牧保よ
り寄進される。この像は、弘法大師が成田山新勝寺に納めた像を模した
ものである。

昭和43年6月に渡辺照寛が病気のため住職を辞任し、一時無住となる
が、総本山化主の竹村教智猊下が北海道に御巡錫の際に総代が懇請し、
昭和49年12月10日、出流山満願寺(栃木県栃木市)の山瀬隆幸が住職と
なる。

昭和51年に内仏殿を建立するなど境内地の整備を行う。

平成元(1989)年に北海道三十六不動尊霊場第23番札所となり、
平成18年10月15日に北海道八十八カ所第52番札所となる。

また、同寺では、現在地に移転後に庫裡の一部を活用して宿坊「菊水」
を運営していたが、徐々に宿泊客数が減少したため、平成25年頃に宿泊
業を廃止した。

歴代住職

- 初代 本間実咩
 2代 神野実雄
 3代 森高観恵
 4代 渡辺照寛
 5代 山瀬隆幸
- ※3代と4代の間には無住の時代があり、2、3人が在任していたものと考えられるが不詳。

金剛山了英寺

所在地 登別東町2丁目31番地1

宗 派 浄土真宗本願寺派

本 尊 阿弥陀如来

創 立 明治40（1907）年4月10日

寺号公称 大正3（1914）年9月18日

由 緒 等

香川県綾歌郡羽床村出身で常願寺（現奈良県橿原市）住職の熊野力精が北海道開教師に任じられ、明治30（1897）年幌別村無番地に真宗興正派説教所を開創する。その後、説教所の信徒が方々に転居したことから、説教所を登別村に移転することとなり、熊野力精も同34年に砂川村（現砂川市）に移住して、同地で力精寺を開創する。幌別村でそれまで使用していた建物は、同37年に幌別村に寄付をしている。

明治40年4月10日に登別村の説教所の管理を引き継いだ有坂了澄は、

同地に堂宇を建立し、同41年11月9日に北海道庁長官河島醇（当時）から説教所として公認される。

大正2（1913）年5月に寺院創立願を提出、翌3年4月に再願し、同年9月18日指令第6398号で許可となり、了英寺を公称する。

大正5年9月に本堂の落慶法要を行い、同6年7月には本尊の阿弥陀如来（京都市仏師武田新兵衛作）が、同年10月には本常上人御影像が寄進される。昭和10（1935）年には庫裡を新築、同33年6月に本堂を改修し、翌月に有坂了孝が住職に就任する。同45年に庫裡を、同55年には本堂を新築する。また、同57年には納骨堂（現「俱会堂」）を新築し、平成14（2002）年には本堂後堂に永代納骨供養堂「安楽国」を造営している。

平成17年8月31日に開基百年記念事業として門信徒会館「澄孝院」を新築竣功し、同20年6月13日に寺歌を刻んだ記念碑の除幕式を北海道総巡化中の真宗興正派華園真暢門主が執行し、翌14日には開基百年慶讃法要を厳修した。

平成24年7月31日に真宗興正派との被包括関係を廃止して単立宗教団体となり、同26年4月30日に浄土真宗本願寺派との間に被包括関係を設定する。この間、同24年には境内に共同墓所併設の屋内御廟「紫千堂」を新築し、翌25年12月26日に重要無形文化財保持者（截金）江里佐代子の技法が施された阿弥陀如来立像（京都市仏師江里康慧作）を迎え、同日遷座法要を厳修している。

了英寺では、昭和36（1961）年4月6日にユカラの伝承者金成マツの町教育委員会葬が営まれており、また、同39年5月30日には金成マツの妹で紫綬褒章受章者の知里ナミの葬儀も営まれている。

歴代住職

- 第1世 有坂了澄
- 第2世 有坂了孝
- 第3世 有坂了堅

紫雲山金毘羅寺

所在地 登別東町3丁目36番地

宗 派 高野山真言宗

本 尊 金毘羅大権現

創 立 昭和39（1964）年1月1日

寺号公称 昭和40年5月17日

由緒等

苫小牧市錦岡の金毘羅院住職の秋山宥盛が、海陸の安全と招福の神・金毘羅大権現の道場の建立を發願し、登別、室蘭、白老をはじめとする太平洋沿岸並びに北見及び函館の檀信徒有志の協力を得て、昭和39年1月1日に臨海温泉高台に仮本堂と庫裡を建立する。

昭和54年4月から本堂の本建築にする工事を開始し、同55年10月に落成し、慶讃法要を行う。昭和61年12月、弘法大師信仰者の要望により納骨堂新築、平成27（2015）年10月に寺号公称50周年の慶讃法要を行い、あわせて内陣の充実と境内地の整備を図る。

歴代住職

- 初代 秋山宥盛
- 2代 秋山恵教

光明寺

所在地 登別東町4丁目7番地1

宗 派 真宗大谷派

本 尊 阿弥陀如来

創 立 大正5（1916）年5月4日

寺号公称 昭和23（1948）年4月6日

由緒等

大正5（1916）年5月4日、富山県南砺市の光明寺住職吉田陽順が登別村字ホロヤチ417番地（現・登別東町1丁目25番地1）に真宗大谷派登別説教場の開設を北海道庁に出願し、同6年7月13日に認可を受ける。

昭和9（1934）年10月20日に現在地に移転し、このときに吉田正成が住職を継ぐ。同17年3月31日に教会規則の認可を受けたことにより真宗大谷派登別教会と称す。同23年4月6日に寺号公称する。

昭和33年3月の信徒総会において堂宇建立を決定し、同年8月17日着工、11月16日に落慶法要を執り行う。

60周年記念事業として、納骨堂を昭和53年3月に着工し、同年9月に落成する。また、翌年9月に60周年記念法要を執り行う。

その後、平成10（1998）年10月28日の本堂修繕と庫裡新築、平成19年4月3日の納骨堂移転新築、同21年7月22日に旧納骨堂を書院に改修するなどの境内の整備を行う。

また、この間、平成11年11月25日に吉田正成が逝去したことに伴って、平成12年1月28日に吉田賢勝が住職に就任し、同25年10月4日及び5日

に宗祖親鸞聖人七百五十回忌御遠忌法要と光明寺草創百年記念法要を執り行う。

歴代住職

初代 吉田陽順

2代 吉田正成

3代 吉田賢勝

本晃寺

所在地 中央町1丁目7番地1

宗派 浄土真宗本願寺派

本尊 阿弥陀如来

創立 明治26(1893)年9月25日

寺号公称 明治40年10月7日

由緒等

明治26年1月5日に本教寺(室蘭市常盤町)住職・藤森顕城が、室蘭外五郡役所に対して本願寺派幌別説教所の設置願を提出し、同年9月25日に設置が許可され、藤田政詮が留守居となる。説教所の土地は、片倉家旧家臣の一人・齋藤良知から幌別村字ハマ39番地の2(現・中央町2丁目11番地付近)の土地30坪を借り受け、民家13坪を買収して用意する。明治36年に本教寺副住職となっていた藤田政詮が常在の担任教師となる。同40年7月15日に寺号公称を出願し、同年10月7日に許可され、この時に藤田政詮が開基住職となる。

明治43年8月に北海道帝国鉄道管理局が幌別砂利採取線の軌道を敷設

することになったので、境内地のうち一部分を交換する。また、昭和6(1931)年2月には、北海道硫黄(株)が敷設する軽便鉄道が境内地の中央を通ることとなるため、現在地に移転する。

昭和39年1月23日に本堂及び庫裡を新築落成して落成慶讃法要を執り行い、同40年10月5日、附属納骨堂が新築完成する。

その後、納骨堂及び庫裡の老朽化並びに狭隘化のため、昭和57年7月に納骨堂、同58年12月に門徒会館及び庫裡を新築落成する。

平成元(1989)年7月5日、本願寺第24代即如門主ご巡教において帰敬式が行われ、平成14年から22年にかけて寺号公称百年記念事業を総代、門信徒一同の協力により行う。この事業では、本堂及び鐘楼堂屋根修復、本堂内陣及び余間修復、参拝者席の整備、門徒会館の各種施設の整備補修を行い、寺院百年史誌を編さんして発刊した。平成18年10月7日には、寺号公称百年慶讃法要を厳修し、記念祝賀会を執り行っている。

また、藤田政詮は、ライバ321番地(現・鉾山町7番地)に鉾山説教所を大正4(1915)年9月1日に創立している。現在、説教所があった場所には、地藏菩薩像1基、鉾山での犠牲者追弔のために大正6年9月に建立された納骨塔1基と坑内員の墓3基が残されている。

歴代住職

初代 藤田政詮

2代 藤田詮城

3代 藤田正善

4代 藤田晃城

5代 藤田浄

妙徳山法華寺

所在地 中央町1丁目16番地1

宗 派 日蓮宗

本 尊 久遠実成本師釈迦牟尼仏

創 立 明治38(1905)年6月28日

寺号公称 昭和37(1962)年10月1日

由緒等

明治38(1905)年6月28日、熊谷義友が寺院建立を発願し、札幌市豊平区の日蓮宗経王寺住職・権大僧正松井日量の徒弟となり、同師の名義によって日蓮宗幌別教会を設立する。しかし熊谷義友は諸権利等の手続きが完了していない昭和17(1942)年2月20日に遷化する。

これより先に青森県青森市の蓮華寺住職の徒弟・白川堯眞が熊谷義友の後継者となつて、盲目の同師を助け、寺院の設備、境内地の確保などに専念する。そして、昭和23年4月30日に寺院教会の境内地として土地771坪を7710円で北海道財務局長より払い下げを受け、寺院の基本財産を確立した。

白川堯眞は、堂宇整備のかたわら、昭和30年5月本堂を使用した季節保育園を開き幼児教育にも取り組み、昭和35年9月13日遷化する。

その後、2年間の空白を経て昭和37年6月に妙法寺(夕張市)住職・鍋谷寛明の徒弟・木村寛義が後を継ぎ、同38年1月28日に檀信徒の協力を得て「宗教法人妙法山法華寺」の寺号が認証される。

昭和39年には白菊幼稚園を増築し、同年6月公認「白菊幼稚園」として道庁認可となる。白菊幼稚園は、昭和56年12月4日に「学校法人登別

立正学園白菊幼稚園」となり、平成6(1994)年2月に桜木町2丁目に移転する。

本寺には、俱多楽湖でヒメマス養殖などに取り組んだ中尾節蔵が一期下宿していた。

歴代住職

開基 熊谷義友

初代 白川堯眞

2代 木村寛義

3代 木村尊信

4代 木村寛朋

幌別山千光寺

所在地 中央町2丁目1番地3

宗 派 高野山真言宗

本 尊 大日如来

創 立 明治26(1893)年

寺号公称 昭和7(1932)年9月13日

由緒等

明治22(1889)年頃、長慶寺(三重県名張市)の資教師試補大藤経全が幌別に来往して真言宗の布教を始める。同26年に松井林蔵ほか4名で来馬墓地に移転した共同墓地の跡に高野山真言宗の説教所を創設する。このときの本堂及び庫裡は松井林蔵から旧宅の寄付を得て使用していたものである。

明治27年に高野山普賢院より大日如来、愛染明王、不動明王が下賜され、徐々に寺としての態様を整えていき、同33年に高野山大師教会札幌支部を開設する。

明治42年、福岡義暢が本山より正式に住職として任命され、開基住職第1世となり、同43年に西国三十三カ所観音霊場を設立する。その後、寺号公称に向けた活動を行っていたが、昭和3（1928）年6月に遷化し、その後任として秋山性純が同年7月に就任して、正式に寺号を公称する。説教所創設から公称までの間、「豊国山真言寺」（明治31（1898）年）、「真言教会所」（大正15（1926）年）と称する時期もあった。

昭和5（1930）年12月30日に総代南恒平ほか6名の連名で北海道庁に対して寺院創立願を提出し、昭和7年9月13日に創立の許可を得て、寺号を公称する。

昭和6年7月21日、長雨と低温のため不作が続いていた札内の住民からの依頼により不動明王を祭ることになり、新高野山亮昌寺（虻田郡洞爺湖町）第2世住職笠谷霊海が高野山明泉院から不動明王像を奉遷し、岡志別川上流にある滝のふもとに不動堂を建立して安置する。昭和35年に老朽化した建屋が豪雪によって押しつぶされ、不動明王像が一時期千光寺境内建物内に移されるが、昭和54年8月28日に不動堂の再建がなつて落慶法要が行われる。しかしながら、昭和58年9月25日の豪雨により引き起こされた大水によって不動堂が流失し、以後、不動明王像を発見することができなかつた。このことから、住職、総代、世話人が協議して平成元（1989）年9月28日に千光寺本堂内に不動明王像を復元建立し安置している。なお、不動堂を建立していたこの滝は、不動堂流失

後も「札内不動の滝」と呼ばれる。

昭和59（1984）年には、弘法大師入定千五十年御遠忌記念事業として檀信徒会館及び庫裡の新築等を行う。

現在、北海道八十八カ所霊場第53番札所となっている。

歴代住職

- 開山 大藤経全
- 第1世 福岡義暢
- 第2世 秋山性純
- 第3世 笠谷教尊
- 第4世 笠谷宥雄
- 第5世 笠谷教正

光 闍 寺

所在地 中央町7丁目14番地3

宗 派 真宗大谷派

本 尊 阿弥陀如来

創 立 昭和29（1954）年

寺号公称 昭和50年10月11日

由 緒 等

昭和22年5月に樺太から引き揚げてきた開基住職野口龍諦が、真宗大谷派の布教を行うために創立。同50年10月11日に寺号を公称する。平成11（1999）年1月14日に本堂を改築する。

歴代住職

- 開基 野口龍諦
- 2代 野口淑志

大英寺

- 所在地 柏木町2丁目1番地1
- 宗 派 曹洞宗
- 本 尊 釈迦如来
- 創 立 昭和18(1943)年頃
- 寺号公称 昭和32年8月15日
- 由緒等

昭和18年頃、山口県出身の志山喜道が幌別に留錫して布教する。同21年頃に本町204番地(現中央町4丁目)に境内地を求め布教に努める。その後、昭和28年10月に寺地を現在地に移転、本堂建立を計画するが、同30年8月30日、計画半ばにして遷化する。その後、本寺の推挙により志山光雄が入寺し、同32年8月15日に曹洞宗大英寺として寺号公称、同40年に本堂を建立する。

平成4(1992)年7月22日に志山光雄が遷化し、志山弘道が住職に就任する。

平成10年に庫裡及び客殿を建立し、平成24年に本堂の富士通を扶んだ向かいに納骨堂を建設する。

歴代住職 勸請開山 大道英山

開基

- 2代 志山光雄
- 3代 志山弘道

観音山雲照院仙海寺

- 所在地 若山町2丁目43番地22
- 宗 派 浄土宗
- 本 尊 阿弥陀如来
- 創 立 明治41(1908)年10月8日
- 寺号公称 昭和57(1982)年
- 由緒等

北海道炭礦汽船(株)社長の井上角五郎が、自身が設立した日本製鋼所及び輪西製鐵所(現・新日鐵住金(株)室蘭製鐵所)の社運の隆盛を祈願するため明治41(1908)年10月8日、室蘭市御前水町に三傘山観音寺を創建し、釈雲照律師を導師に本尊の千手千眼観世音菩薩の開眼供養を行う。

昭和47(1972)年1月5日、住職が不在となっていた浄土寺(通称・太子殿、室蘭市母恋南町5丁目10の5)を併合する。これにより浄土寺は廃寺となる。

昭和57年に本市若山町に移転、観音山雲照院仙海寺を公称する。

三傘山観音寺は、(旧)北海道新四国八十八ヶ所霊場の第63番札所となっており、合併した浄土寺も同第65番札所であったことから、その後継である仙海寺は、両方を兼ねることとなる。

平成12(2000)年10月18日に本堂の落慶法要及び本尊(阿弥陀如来)の開眼供養を行い、同25年10月18日に納骨堂会館を新築する。

歴代住職

初代 釈雲照律師

2代 山森善通

3代 及川勝芳

4代 及川聖光

法栄山妙隆寺

所在地 富岸町61番地

宗 派 日蓮宗

本 尊 大曼荼羅

創 立 昭和45(1970)年1月

寺号公称 昭和59年2月20日

由緒等

旧称「妙龍寺」として布教活動を行ってきたが、平成13(2001)年に一身上の都合により宗教法人を解散する。

その後、平成13年11月30日に佐々木勝正が新しく同寺において宗教法人を設立し、名称を「法栄山妙隆寺」とする。

歴代住職

初代 佐々木妙龍

2代 佐々木智龍

3代 佐々木日行

4代 佐々木勝正

法栄寺

所在地 新生町5丁目26番地10

宗 派 真宗大谷派

本 尊 阿弥陀如来

創 立 昭和54(1979)年4月

寺号公称 昭和62年2月

由緒等

昭和50年代に真宗寺(鷲別町)の門徒戸数の増加と、若草町、新生町、富岸町のまちの発展が続いていたことから、真宗寺の支院開設の機運が高まり、真宗寺で法務に携わっていた森口勝が門徒より建物を借り受けて寺院として改築し、昭和54年4月に真宗寺支院法栄教会として設立する。

昭和62年2月に法栄寺の寺号を本山より認可され、開基住職として森口勝が就任する。

その後、建物の老朽化や駐車場の不足などのため門徒から本堂及び納骨堂の建設を希望する声上がり、平成10(1998)年に現在地を境内地として定めて平成14年10月に落成慶讃法要を行い、移転する。

歴代住職

開基 森口勝

往還山真宗寺

所在地 鷺別町1丁目33番地

宗 派 真宗大谷派

本 尊 阿弥陀如来

創 立 昭和14（1939）年

寺号公称 昭和31年2月22日

由 緒 等

昭和14年春、日鉄炉材工場が設立され、その社宅の建設が相次ぐなど発展が著しい鷺別に着眼した證誠寺（室蘭市沢町）の役寮村口正義が字鷺別51番地（現鷺別町6丁目14番地）に鷺別説教場を開設する。

昭和17年1月5日に村口正義が死去した後、同年3月27日、善唱寺（石川県鳳至郡能登町）衆徒の森口護が本山より説教場の主管者を命じられて着任する。着任後、名称を大谷派鷺別教会と改称する。同18年4月に召集され、その代行を実弟の森口勤が務めたることになったが、1年余り後に召集され、坊守が留守職として法務を行う。

昭和21年2月に住職が復員した後、国道沿いの堂宇では規模が小さかったため門徒から本堂建設の声が盛り上がり、一度の中断を経て、同28年5月に現在地に堂宇を新築移転し、同31年2月に往還山真宗寺と公称する。

堂宇を移転した翌年の昭和29年9月の台風15号（洞爺丸台風）では納骨室の屋根が半分吹き飛ばされ、本堂が風下に4〜5センチ移動するなど被害が出ているが、このとき、鷺別地区の罹災者の寺への避難の受け入れを行っている。

昭和50年6月、鷺別地区の各宗各派の寺院が協力して「鷺別花まつり会」を結成し、鷺別花まつりを行う。以後は、真宗寺と透禅寺が交互に当番となり市街のパレードと甘茶を注ぐ灌仏法要を行ってきたが、役員の高齢化などにより平成16年の第28回をもって中止する。

昭和57年4月28日、森口達が2世住職に就任し、同59年9月に本堂、納骨堂、庫裡及び門徒会館の落成慶讃法要を宗祖御誕生八百年・七百年御遠忌にあわせて執り行う。

境内地には、近接する鷺別遺跡から発掘された先人を慰霊するために昭和39年に門徒会会長によつて建立された「先住民族慰霊之碑」がある。

歴代住職

説教場主管者 村口正義

開基 森口護

2代 森口達

曹溪山透禅寺

所在地 鷺別町3丁目23番地2

宗 派 曹洞宗

本 尊 釈迦如来

創 立 大正2（1913）年4月

寺号公称 昭和29（1954）年5月1日

由 緒 等

大正2（1913）年4月、安楽寺（室蘭市常盤町）3世住職丹羽月溪が鷺別地区住民の要望にこたえて鷺別説教所を創立し、同5年1月から

初代監寺役として風間忍界が専任し、布教教化に努める。

大正6年5月、本堂及び庫裡を建立する。昭和13（1938）年10月15日、風間忍界が富岸の檀家での法要を終え帰寺の途中に急死したため、藤井泰仙が担当教師として赴任するも、すぐに出征、戦死したため、その後しばらくは苦境の時期を送る。

昭和18年11月28日、堀口透箭が後継担任教師となり教化に努め、同27年に本堂及び庫裡を建立し、同29年5月1日に曹溪山透禪寺と公称する。

昭和47年4月1日に堀口透箭が体調を崩したことから、定光寺（釧路市）徒弟の峰田弘道が後継者として赴任し、翌48年1月25日に4世住職に就任する。峰田弘道は、婦人会、朝粥会、透禪寺少年研修館（書道教室）を立ち上げ、また、市教育委員長や民生委員等を歴任し、青少年の健全育成や地域社会のために尽力する。

昭和59年10月に老朽化していた本堂を改築する。このとき、旧本堂の建立に尽力した檀信徒や役員の功績を後世に伝えるため、旧本堂材木の一部を現本堂の天井裏に守り札として上げる。

平成5（1993）年3月1日に照源寺（青森県弘前市）徒弟の峰田謙二が後継者として赴任する。

平成6年11月に開創80周年の記念として諸堂を改修し、師匠にあたる定光寺住職・大道晃仙により開創八十周年慶讃大法要を厳修、平成10年5月には大本山総持寺副貫主・大道晃仙による大般若経六百卷新添開封祈禱法要を修行する。

平成16年11月に開創90周年を迎えるに当たり、開山堂を建立するとともに第二納骨堂、紫雲堂を増設し、大本山総持寺貫主の大道晃仙を迎えて開創90周年開山堂落慶大法要を厳修する。

平成17年6月21日に峰田弘道が遷化する。長年にわたり嶽山会北海道支部支部長を務めた功績などから「大本山総持寺贈監院」の称号を授けるとともに御本寺より「重興の免牘」を許可される。同年8月2日に峰田謙二が5世住職に就任し、同24年4月より開創100年事業として本堂内外の改修、境内地の整備、山門門柱の新設や、十一面千手観世音像や百体聖観音像などを安置し、平成26年6月に開創100周年大法要を執り行う。

歴代住職

- 開山 丹羽月溪
- 2代 丹羽正英
- 3代 堀口透箭
- 4代 峰田弘道
- 5代 峰田謙二

大心山日教寺

所在地 美園町3丁目11番地2

宗 派 日蓮宗

本 尊 大曼荼羅御本尊

創 立 昭和44（1969）年9月22日

寺号公称 昭和51年8月17日

由緒等

開山山本暁祥は、昭和22年に得度し、法華経の広宣流布の精舎建立のため修行する中で徐々に檀信徒の数が増えたことから、昭和44年9月22

日に現在地に日教教会を創立する。

その後の檀徒の増加に伴い手狭になったことから、昭和48年に本堂を新築し、昭和51年8月17日に寺号を公称する。

平成元（1989）年7月9日に山本暁祥の遷化に伴い、山本恭圓が平成8年7月9日に2代目住職に就任し、同年、老朽化した本堂を改築する。

歴代住職

初代 山本暁祥

2代 山本恭圓

國師山本光寺

所在地 美園町5丁目15番地4

宗 派 真宗大谷派

本 尊 阿弥陀如来

創 立 昭和12（1937）年4月10日

寺号公称 昭和20年5月10日

由 緒 等

昭和12年9月下旬、藤森秀勝が多田幸太郎、沼田勝太郎とともに字上鷺別60番地8に創設、真宗大谷派願成寺副出張所として発足し、同14年10月13日に知利別説教場と改称する。

その後、交通不便と降雨ごとにその付近が泥沼となったため、昭和16年に現在地に移転、藤森現聖が開基住職となる。昭和21年5月15日國師山本光寺と公称し、昭和29年2月10日に宗教法人の認可を得る。

歴代住職

初代 藤森現聖

2代 飯尾哲也（兼務）

3代 高木健宏

その他の寺院

上鷺別町の七面堂（日蓮宗）は、美園町の佐々木妙享が祭主として昭和48（1973）年に開基堂を建立し、多数の信者が参詣していた。祭主が死去した後は地域の信者により護持されてきたが、その信者も高齢化したことなどから、同25年8月に堂宇を解体撤去した。

若草町6丁目の光龍教会（日蓮宗）も住職吉田香祥の死去に伴って教化活動を止めた。

鷺別町2丁目の紫雲山法眼寺（臨濟宗妙心寺派）は、平成元（1989）年3月に室蘭市に移転している。



報徳寺



聖光院



恩泉寺



妙慎寺



禅林寺



滝泉寺



了英寺



金毘羅寺



光明寺



本晃寺



法華寺



千光寺



光蘭寺



大英寺



仙海寺



妙隆寺



法栄寺



真宗寺



透禅寺



日教寺



本光寺

3 キリスト教

カトリック登別教会

所在地 中央町7丁目15番地

創立 昭和34（1959）年11月3日
由緒等

胆振及び日高地方におけるカトリックの宣教は、明治24（1891）年にパリ外国宣教会のベルリオーズ司教、フォーリー神父及びルソー神父によつてはじまり、明治26年には室蘭市常盤町に仮聖堂と司祭館が建設されて室蘭教会が創立し、ルソー神父が主任司祭となり、明治40年にドイツのフランシスコ会が北海道のうち函館地区を除く全道の宣教を担当することとなる。明治44年に室蘭教会司祭のオイゼビオ・ブライトン神父によつて白老村（現白老町）に白老教会が開設され、本市の宣教も同教会によつて行われることとなる。しかしながら、第1次世界大戦の勃発により母国ドイツからフランシスコ会への活動資金が途絶えたことから白老教会の維持が困難となり、大正4（1915）年に同教会が開鎖されたことに伴つて、本市での宣教を室蘭教会が再び担当することとなる。

昭和29（1954）年にローマ教皇庁によつて、室蘭地方を含む苫小牧地区の宣教は、アメリカ合衆国のメリノール宣教会が担当することとなる。同31年には東室蘭教会が室蘭教会から独立し、本市は東室蘭教会の管轄となる。

昭和34年11月3日にジェームズ・コリーガン神父によつて幌別教会が

東室蘭教会の巡回教会として発足し、献堂式が行われる。

昭和39年4月にカトリック幌別聖心教会として独立し、初代主任司祭としてグラム神父が着任。同年8月に教会独立後初の洗礼式と聖体式を執り行い、翌9月に司祭館が完成する。

昭和41年6月には私立若葉幼稚園を買収し、同幼稚園を「幌別カトリック聖心幼稚園」と改称し、初代園長にグラム神父が就任する。

教会及び同幼稚園は同45年の市制施行に伴つて名称を「カトリック登別聖心教会」と「カトリック登別聖心幼稚園」と改称する。

昭和58年2月に新聖堂建設に向けた建設資金の積み立てを開始する。平成2（1990）年10月に新聖堂が竣工する。この聖堂は、翌3年6月に献堂式が行われる。

歴代主任司祭

- 第1代 ベルトラント・グラームスパーカー
- 第2代 ペーター・オーガスチン・ウォルシュ
- 第3代 ドナルド・ユダ・ビッテンゲル
- 第4代 エドモンド・ローレンス・ライアン
- 第5代 ヨゼフ・V・メナード
- 第6代 マイレット・ジェームス



カトリック登別教会

- 第7代 ギング・リージス
- 第8代 ライヤ・フランシス
- 第9代 ボーソレイ・ジェラルド
- 第10代 宋榮峻
- 第11代 上杉昌弘
- 第12代 韓最守
- 第13代 ライヤ・フランシス

登別中央福音教会

所在地 中央町5丁目22番地2

創立 昭和39年8月8日

由緒等

昭和39（1964）年5月、エドウィン・プリン宣教師が家族とともに幌別に来訪し、幌別町字来馬に宣教館を開設する。翌40年3月に吉岡健二が下馬福音教会（東京都）より着任する。同氏は着任すると早速教会の整備に取りかかり、土地を購入して、教会の建設工事を始め、同年



登別中央福音教会

8月8日に在日スウェーデン福音宣教団「幌別福音教会」の献堂式が行われる。昭和46年、吉岡健二が離任すると、その後任に高橋茂雄が着任する。

昭和49年3月、日本聖書

福音宣教団が設立し、50年4月に在日スウェーデン福音宣教団から日本聖書福音宣教団への不動産譲渡式が行われる。52年4月に高橋茂雄が離任し、その後任に高橋敏夫が着任。

昭和55年4月に教会名を「幌別福音教会」から「登別中央福音教会」と改称した。平成5（1993）年6月に新教会建設に向けた起工式を行う。4ヶ月間の建設工事期間中は、一般住宅を仮教会として借用した。同年10月3日に「新会堂献堂式」を執り行う。

平成14年10月、宗教法人格の取得を決議し、翌15年5月に宗教法人「登別中央福音教会」の登記完了を確認する。平成27年7月から10月にかけて教会創立50周年記念の式典や行事を相次いで行った。

同教会では、毎週日曜日に開催する日曜礼拝のほか、各種行事を開催するなど活発な活動を行っている。また、平成14年10月の「世界食糧デー第1回登別大会実行委員会」に参加したことを皮切りに、その後も「飢餓に苦しむアフリカの子どもたちへの支援」に向けて、毎年、募金活動や啓発活動を行っている。

3代目牧師の高橋敏夫は、民生委員・児童委員や人権擁護委員として地域の社会福祉向上にも尽力している。

歴代牧師

- 初代 吉岡健二
- 2代 高橋茂雄
- 3代 高橋敏夫

4 新宗教

松緑神道大和山幌別道場

所在地 片倉町2丁目5番地6

祭神 大和山大神

創立 昭和33(1958)年9月

由緒等

大和山大神の経緯によって教祖大和松風に神示され、これを松緑神道大和山と称し、昭和5年1月に結成。昭和33年6月に勤修の場として幌別道場を現在地に建設し、同年9月に完成した。

天理教六陽分教会

所在地 富浦町1丁目7番地6

創立 昭和27(1952)年4月

由緒等

昭和27年4月、字幌別町237番地(現・中央町1丁目4番地8)に教会を設立し、同年9月に宗教法人格を取得する。昭和58年5月21日に火災で神殿及び教職舎を焼失する。その後、同60年に現在地を取得し、同61年に新築移転する。

天理教の本市内にある分教会は、北園分教会(富岸町)、登別分教会(上登別町)、陽登分教会(中登別町)、有栄分教会(片倉町)などがある。また、その他の新宗教では、崇教真光登別お浄め所(千歳町1丁目

1番地1、平成4(1992)年5月15日創立)、生長の家幌別道場(富士町1丁目3番地3)、昭和57(1982)年8月31日)などがある。

参考文献

- ・登別町『登別町史』昭和42年
- ・登別市『市史ふるさと登別』昭和60年
- ・内務省『北海道胆振国幌別郡神社明細帳』
- ・小原福太郎『小原家沿革覚書』
- ・瀧泉寺『沿革』
- ・山本平雄『千光寺 百年の歩み』平成6年
- ・日蓮宗北海道大鑑刊行会『日蓮宗北海道大鑑』昭和62年
- ・真宗大谷派往還山真宗寺『真宗寺開基七十周年記念誌「遠慶宿縁」』平成21年
- ・日本基督教会室蘭教会『日本基督教会室蘭教会七十年史』
- ・日本基督教会室蘭教会『日本基督教会室蘭教会百年史』
- ・日本聖公会北海道教区歴史編纂委員会『教区九十年史』1965年
- ・カトリック登別教会『献堂50周年記念ミサ・祝賀会しおり』2009年11月1日
- ・北海道新聞社『北海道新聞』各号
- ・室蘭民報社『室蘭民報』各号